



116  
M6  
137

少女文庫  
家庭之心得



116  
134

少女文庫  
第五編

家庭之心得



家庭の心得

緒言

余は、近來、家庭教育不十分なりといふ聲の、やうく  
高くなり、行くを憂ひて、いかにせば、是れを救ふ  
の道あらんか、深く心を痛めつれども、いみじき考

案も出で來ず。されど、其原因は、母親の、我れは今の  
教育を知らず。この手びかへよりして、知らずく  
も、年少の子女を慢らしむるの悪結果を生ずる等の  
事無きにもあらじと覺ゆれば、希くは、少女が家庭  
に於ける、心用ひと行爲との、斯くあれかしと覺ゆる  
ふしぐを示さば、尙已むに勝る事もあらんかして、





此書を物する事とはしつ。されど、こは、お伽噺の一種に屬するものにて、打ち任せて、修身書と云ふべきものにあらねば、なるべく、幼き人に興味を感ぜしめんと欲するまくに、勉めて、目に近く見もし聞きもせし所の、善き模範と悪き模範とを取りて示さんとするなり。故に、其姓名は、殊更に省きて載せざるもあり。また少女と云へるは、未婚の女子の通稱なるべけれど、爰には、専ら、小學年齢以下、即ち、五六歳より、十五六歳までの女兒の爲にと物しつるなれば、幸ひにこれを諒せられよかし。

明治三十五年四月

著者誌

少女文庫  
第五編

## 家庭の心得目次

### 一 少女が家庭に於ける注意

長者に對する心得	二
少女に對する心得	二〇
召使に對する心得	二四
朋友に對する心得	三二

### 二 少女が家庭に於ける行爲

長者に對する行ひ	四一
少女に對する行ひ	五四
召使に對する行ひ	六九

目次



目次

朋友に對する行ひ

八九

三

少女が家庭に於ける任務

一〇二

日課

一〇四

臨時の事

一六一

家庭の心得目次終

少女文庫  
第五編

家庭の心得

下田歌子著

一 少女が家庭に於ける注意

女兒生れてゆく幼稚園に入る頃より、小學校を卒業するま  
 で、尙今少し進みて、高等女學校程度の程、即ち其年齢を云へば、大  
 抵四五歳より、滿十五六歳までの間は、其精神も、身體も、最も發育  
 進化の速かなる時代にして、此時代に、善くも悪くも形ち作られ  
 て、一生涯の幸不幸が別るゝ基礎となる時なれば、殊に能く注意  
 して、善き人とならねばならぬなり。さて、其發育進化の速かなる  
 程は、また殊に、物に移り易き時に、恰も、其が身體の、未だ大人の

少女が家庭に於ける注意

一



家庭の心得

如く整はぬと同じやうに精神もまた十分に固らぬものなれば、  
 縦令天性賢く生れて且つ日々に種々の智識を附け加へらるゝ  
 ことありとも決して己れ、伶俐と誇りて、萬事己がまくにふるま  
 ふ事ある可らず。若し大人になりて、其少時を顧れば、獨背に汗の  
 流るゝこと多きものぞかし。さて、此少女時代には、大方家庭に  
 半ば、學校に半ば居るものにて、單純なる少女等が、腦裡は、毎日毎  
 日家庭の事、學校の事、このみが往行し居るなり。されば、其兩所  
 に在る程の注意、行爲、任務、遊嬉の四つが、宜しきを得る時は、必ず、  
 他日、善き婦人となることを得べし。猶學校の事は、後篇に云ふべ  
 し。

長者に對する心得

少女が家庭に於て、先づ長者と云ふべきは、父母、祖父母、兄弟、伯叔  
 父母等なり。其中、伯叔父母は、同居せずして、離れ居る場合多く、兄  
 姉も、亦既に他へ嫁に行き、又は養子となり、分家したる等にて、一  
 所に居らぬ事あり。祖父母も、母方などは、大抵別の所に住まはる  
 くなるべし。されば、普通、同じ家に在るは、父母及び父方の祖父母、  
 嗣子の兄並びに、まだ年若の兄弟等なるべし。そは、一つ家に居る  
 こと否に關はらず、少女がこれに對する心用ひ、大體は、決して替  
 ること無きものご心得て可なり。さて、これに對する少女が心得  
 にも、さまざまあるべければ、序に従ひて、次々に云ふべし。  
 少女が幼稚園時代は、未だ假字をも習ひ得ぬ程なれば、此書は、母、  
 姉等、其他の長者に讀みて貰ひて、其説明を聞くべし。此時代は、最  
 も幼稚の時代なれば、長者に對する注意も、格別むつかしき事を

少女が家庭に於ける注意



家庭の心得

四

ならふに及ばず。常に長者の仰せを直ほに聞きて、大人しくすればよし。心に欲し望む事あらば、遠慮なく云ふはよし。長者の其れは最もなりこて、受け入れ給はゞ深く悦び、若し悪しこの給はゞ、決して泣きむづからず、直ほに聞くべし。むづかりて、長者に心配をかくるこ勿れ。

或所に、孝行なる少女ありけり、其齡七つばかりの年、満五歳か六歳なり、外に出で、友達と遊ばんこて、下駄穿きて出づるを見て、母は聲をかけ。

オイ、もうお天氣が好くなつたから、草履を穿いておいで、……下駄ではあぶないから、

少女は、母の詞を大人しく聞きて、ハイ、こ返事して、草履を穿きかへて出づる時、父は母の斯く云ひつけたるを知ら

ざりしかば、この少女を呼びこめ。

汝、まだ外は道が悪い

よ、……

草履は

止して

下駄を

穿いて



少女が家庭に於ける注意

五



御出で、

少女はまた初めの如く、ハイと返事して立ち歸りけり  
 ども父の詞に従へば母の云ひけつに背く事となり母の云  
 ひつけに従はんこすれば父の詞に背く事となる故、いかに  
 せんご案じけるが遂に兩人の詞に背かぬやうにする方然  
 るべしこ小き胸に考へ定めて下駄片足草履片足穿きて  
 出でけり然るに友達はこれを笑ひて、さまざまに嘲弄しけ  
 れども少女は更に一言の云ひわけもせず遊びの事果てく  
 家に歸りぬ歸りて後、此事のわかりて彼の少女は父母の詞  
 に従ひたさに斯様の事をもせしなりけりこ人々感じあへ  
 りきごぞまここに感心なる少女にあらずや此少女の心に  
 は、たゞ何ごしても父母の心を安んじたしと思へる幼き考

へに斯く斗らひつる心用ひの程こそしほらしけれ。

さて、やうく小學にも入りて、文讀み物數ふる事も覺ゆる程に  
 成りたらば父母に安心させ參らするやうに心かけ風引かぬ  
 やう、食べ過ぎぬやう、負傷せぬやうに注意すべし。殊に我儘氣  
 儘を出ださず直ほに大人しく又活潑にあるべきなり。

むかし支那の漢の代に鄧禹といふ人の孫女、綏といへる女  
 兒は極めて直ほに賢き兒なりしかば、祖母深くこれを愛し  
 て常に我が傍らに侍らせけり。一日、綏が前髪を剪るごて、眼  
 の悪き故に、過ちて、鋏のさきにて、其額を傷けければ、血は流  
 れて眉の邊りに滴りぬ。されども綏は少しも驚きたるさま  
 も無く、又傷しこも云はざりければ、事果てく後、侍婢たち、打  
 ち寄りて。

少女が家庭に於ける注意



家庭の心得

八

マア阿嬢、……こんなにお傷がつきましたのに、貴嬢、能くお傷いとおつしやいませんでした子。……ごうして耐らへて居らつしやいました、

ご問ひければ、少女は眼に一杯の涙を溜めて。

私は傷かつたの。まだ今でも傷いけれど、若し彼の時私が傷いご云つたら、太夫人がびつくり遊ばして、そして私を不憫だご思召すご、お氣の毒なもの。其れで私は我慢して居たの、

ご云ひければ、人々、この少女が心根の優しきに感じあへりき。斯くて、緩が十二歳ばかりに成りける頃は、能く學問上達して、詩經や論語のわからぬ處を、兄達が妹の緩に質問する事さへあるを、母はこれを見て悦ばず。



少女が家庭に於ける注意

九



家庭の心得

女は女の業が出来た上で男のするやうな事さへ出来る  
ご云ふなら宜いけれども女の業が出来ないのに男のす  
るやうな事が出来たつて何にもならぬ。汝はまだ衣服一  
枚碌に縫へやアしない、

と小言いひければ、緩は恐れて、これより晝夜裁縫紡績の業  
に勉め、只管母の心を安んぜん事を願ひたりごぞ。いごもい  
ごも感ずべき事なり。

斯くて次第に齡も重なり、學業も進み、分別も附くやうになりた  
らば、其幼き内の如く、たゞ兩親に心配かけぬやうに、ごねんじた  
るに止まらず、ますます進みて、父母の心をも慰め、父母の行爲を  
も助くるやうに、ご心がくべし。

佛蘭西のある州に住む、マリーと呼べる少女は、心さま直ほ

に行ひ正しき人なりけり。父は軍人にて、早く歿し、母と二人  
のみ、幽かに世を渡りしが、母は、其夫を失ひしより、兎角、心經  
過敏となりて、喜怒常ならず。且つ、次第に氣隨になりて、其勉  
めんとする時は、能く勉むれども、勉めじと思ふ時は、いかな  
る客ありても、出で逢はず。何方の招きにも應ずる事無かり  
けるを、少女マリーは、憂き事に思ひて、父親無くなりては、萬  
づ人の助けを請ふ事のみ多きを、斯くては、遂に、親戚も友達  
も、愛想をつかせて、助け無きにも至るべしと思ひ、竊かに母  
を補助して、直接に間接に、母が過失を補ひけり。さて、マリー  
が十六七歳に達したる頃、母は遂に、一種の心經病者となり、  
全く狂人の如きふるまひのみ募りて、且つ、身體もますます  
衰弱しけるが、少女マリーは、能く、此不幸なる母に孝養をつ

少女が家庭に於ける注意



くし又親戚朋友の交際其他少しも父が在世にかはらず立派に取り行ひければ、これを見もし聞きも傳ふる人感じあひて、ますます助くる人多くなりぬごぞ。まことに慕ひ敬ふべき美談にこそ。

少女が祖父母に對する心得は、父母に對する心得と格別替る事無し。雖も祖父母は、父母よりも年老いて、身體も弱く成り、心も短くなり給ひぬべければ、いご心にして、逆らはぬやうに、優しくしむけまらすべし。且つ祖父母は、己れが心身の衰へゆくまゝに、孫には愛のみ深く成りて、世に云ふ甘やかし過ぐる等の事無きにあらねば、少女達は、其愛情の深きは、忝く受くべきも、これに附け上りて甘へ、父母の嚴かなる教へは、却つて疎みて、ただ祖父母の甘き詞にのみ、たよるが如き、云ひがひ無き心は持つ

可からず慈愛なる祖父母には、親み尊ぶべく、嚴格なる父母には、畏み従ふべし。さりさて、老いたる人に對ひて、賢こぶり、強情なるやうの事は、ゆめくある可らず、能く其行末短き老人の上を思ひやりて、萬づに親切なる心用ひ肝要なりかし。

むかしある所に、喜世と呼べる少女ありけり。父母はなほ、年若くて、且つ嚴かなる人なりき。祖母は年老いて、たゞこの一人の孫女の喜世をのみ愛しけり。ある時、母は、女の喜世に命じて、綿入の解物するやうに云ひ置き、己れは用事ありて他出しぬ。喜世は、母の命じたる解物に餘念無かりけるを、祖母は、それを見て。

マア、喜世や、この好い天氣に、そんなに引込んで、せつせこ働かないでも宜いよ。私こそ一所に庭に往つて遊ばう、



ごとて無理に喜世が手を取りて立ち出でけり。喜世は母の命  
 じたる事の心にかゝれば暫らく祖母と遊びてやうく家に  
 家に歸り入り急ぎ解き果てんと思ひつれどもえせぬ程に  
 母は歸りて其命令に背きたるを叱り懲らしけり。されど喜  
 世は少しも祖母に強ひられたる事を云はざりければ母は  
 ますく怒りていたく此少女を責めけり。斯かる事しばく  
 なりければ祖母世に在る程は更に左様の事とも知る人  
 無かりけるが祖母歿りて後は嚴格なる父母のますく掟  
 てと命令二途に出でざりければ喜世はたゞ父母の心のま  
 とになす事を得るに至れり。偶まこの事情を知る人ありて  
 少女に云へるやうは。

貴嬢此頃は、大層なされ宜いでせう子。祖母様が入らつし

らなくなつたから、  
 さ云ひしかば、少女はさめくご打ち泣きて。

其れは、阿爺や阿母の御爲仰る事の方が私の爲になるの  
 です。……けれども祖母様も、たゞ私が可愛いと思つ  
 て、甘やかしたのですもの。……私は、そんなに苦勞をして  
 も、やつぱり祖母様が居て下されば宜いと思つて、懐かし  
 くてくになりまぬ、

ごとて泣き伏しければ云ひつる人、悪き事を云ひ出で、孝女  
 の心を苦しめけるよごいたく後悔しけりごぞ。

兄弟は、父母程に年も違はず、又其位地も父母とは均しからねば、  
 同は長者と云ふけれども、親しみは増りて慕しさは、つひく薄  
 くなりがちのものなれば、其親しみの厚きは宜き事なれども、親



しさに馴れ心易だてに過ぎて己れ妹と云へる位地を忘れ我儘のふるまひ無きやうに心かくべし兄弟は恰かも一つ木の幹より生じたる枝の如きものなれば枝と枝とが傷かば幹にも害の及ばん事を思ふべきなり。

むかしある藩の小臣なる土佐藤某といへる人の二女長は、金と呼び次は近と呼ばれき。この次女の近はまことに心だてやさしき女兒にて常に姉を敬ひ親しむ事大方ならざりき。一日友達の家に招かれて姉妹二人して行きつるが其父母は日暮れぬ程に還るべしと命じぬ。斯くて終に面白く遊びて夕ぐれにも及びければ妹は姉にむかひて父母の命のまくに還らんを勧められども姉は遊びに心をこられて妹のしばしを還らんを促すをも聞かでつひに夜に入る

迄ごごまりけり。さてやうく家に還りければ父母は甚だ機嫌悪くて姉なる金を叱り。

汝なぜ云ひつけた通りに早く還らなかつた、と云ひしかば金はありのまくに告げなば父母のますく我れを叱り給はんと思ひ。

私は還らうと思ひましたけれども妹が餘り面白さうに遊んで居りましたからつひ其れにほだされまして、と偽りの云ひ譯しければ母は更に妹を呼びて。

汝なぜ姉様の云ふ事を聞いて早く還らなかつた、こなじらるゝ事は全く自分の考へとは反對の事にて父母に叱られけるなれども實を告げなば姉のいかばかり叱られ給はんと思ふに悲しくなりてたゞ。

少女が家庭に於ける注意



恐れ入りました。御免下さい、

涙ながらに詫びけり、父母は是れを見て

汝はまだ小さいから、しかたが無いが、以後は何事も姉の

云ふ事を聞かねばならぬぞ、

更に姉の方にむきて、

妹も悪いけれども、汝は年かきであるから、縦令、妹が嫌ご

云つても、父母の仰せだからつて、汝が妹を強ひても、勧め

て連れ還らねばならぬから、左様心得たが宜い、

斯く云はると、姉は見す、我が偽りを云ひたる爲に、父母

の命には従ひて、我れを促したる妹を叱らする事の、何ごも

面目無く、穴にも入りたき心地してたゞ、ハイ、返事

のみして、さて、父母のほこりを退き、竊かに妹を招き寄せて、

お近や許しておくれ、私が全く悪かつた。つひ叱られるの

が怖さに、叱られなくても宜い、汝を叱からせて、……もう

もう以來決して、父母の命令には背かぬ、また偽言もいは

ぬから、此度は堪忍しておくれよ、

妹は、さも嬉しさうに、姉の顔を見て、

私の叱られるのが嫌だと思ふ位なら、私は彼の時、云ひ譯

をします。そんな事は決して御心配遊ばすな。……これか

ら、姉様が、偽言をつかぬ。父母の命令に背かぬ。ご御爲仰つ

たのは、實にく、嬉しいんです、

ご答へたる、妹の心がけこそまことに感すべき事なれ。

伯叔、父母及び他に別居せる兄弟などの訪ひなしたる時は、我が

力の限り、まごころを盡して、心をも慰めまらすべし。こも亦直



家庭の心得

ほに正しき心がけぞ何より肝要の事なる。

少者に對する心得

少女が家庭に於て先づ少者云ふべきは弟妹若しくは甥姪のある事もあらん。此内には召使を籠めても云ふべきなれども愛には便宜上召使は別に云ふべければこの少者は骨肉の者のみと思はるべし。扱この弟妹は己れよりも尙年少なくして心身ともに未だ充分に發達をせぬ者もなれば一層心をつけて親切にあるべし。

某所に十歳にも足らぬ少女の心だていこやさしきがありけり。其弟は未だ五歳ばかりにして殊に身體虛弱なる故にや。疝氣強くて何か心にかなはぬ事あれば父にても母にて

も更に見さかひも無く打ち敲き、抓きむしりなごす、又いか程己れが愛し居る翫具にても疝氣つりのりたる時は忽ちに打ち毀しけり。されば當家にあるごある、召使ごもは云ふに及ばず。この小兒の疝起りたる時は父母も怖れて、

少女が家庭に於ける注意





逃げ避くる程なるに、姉なる少女のみは、決してこれを怖るゝさまも無く、且つ逃げ隠るゝ等の事は、一度もなきざりけり。然るに世に親切ばかり強き力を持つてゐるものは無し。この疝氣烈しく、狂人じみたる小兒も、姉一人には、まことに柔順にて、其最も甚しく疝の起りて、荒れ狂ふは、少女が學校なごへ行きたる留守に多く、家に在る時は極めて稀なりき。そは、少女が、いかなる手段を以て、小兒を宥めつるご云ふに、何の替りたる手段も、行ふにあらず、たゞ其恐ろしく、耀く眼の光、青白くなりたる顔の色をつくぐ、ご見る眼には、一杯の涙の溜めて、ほつご太き息をつくのみなるが、少女はこの病が、ちの弟が左様のふるまひを見る時は、常に、あら悼はしや、病の爲に、斯く自らも苦しみて、人にも嫌はるゝよ。いかにせば、

この病愈やして、人並の身體ごはなるべき。ご思ひつゞくるぞ有かたき。あくこの可憐なる少女が、慈愛深き眼には、いかで我が身を犠牲にしても、このいごしの弟だに救はれなば、ご身を捨て、思ふ心の通ずるなりけり。斯かる有様にて、數年を経たりしが、つひに、弟が十二三歳に及ぶ頃には、次第々々に、疝氣鎮まりて、大抵人並の行ひを爲すに至れりごぞ。むかし、印度のある所を、旅人の通りけるに、獅に出で遇ひて、ごても、遁れ難しご覺悟しけるに、獅は、旅人に飛びかゝらんごもせず。何やらん、呻き苦しみ、救ひを求むるが如く見えければ、旅人は、怖るゝ、近寄りて見れば、獅の足に、太き荊の刺を立て、苦しむ様子なり。旅人、惻憐の心禁せず、怖さも忘れ、て抜き取りてやりけるに、獅は、さも嬉しげにつくぐ、ご旅



人の顔をながめ、其手を甜りて、感謝の意を表しけりとは、彼の國の讀本にも載せらるゝなり。猛獸の心さへ、親切といふ強き力には抑さへらるゝものなれば、この少女がまごころには、小兒の疝氣のをさまるに至れるも宜なり。

又甥姪女、從弟妹等も我れより年したなるは、やはり弟妹と同じやうの心得にて親切にあるべし。

召使に對する心得

女兒、年少の頃、父母のもとに在る間は、其養育、教訓すべての事、みな悉く、父母の恩に浴して、始めて人となるなれば、其程は、何一つごして、父母の物ならぬは無し。故に、召使の甲乙も、亦皆、父母の召使にして、我が私わたくしの者ならず。然るを、己が爲したき儘に、追ひ使ひ、

或は、我儘氣儘のふるまひを爲す等は、まごころにあるまじき事なれば、能く慎みて、苟くもす可らず。

況して、女は萬づにつけて、慈愛の心深かるべし。思ひやり薄く、荒々しき心さま、つゆばかりもある事勿れ。又己れは年少にして、父母の蔭による身なれば、萬事控へ目にして、いたはり使へども、召使の者ごも、却りて其れを忝かたじけなしごも思はず。侮りがまじきふるまひ等をなす事あらば、それは我が威光の薄き故ぞ。心得て、いよく、我が身を慎み、自ら勉めて、能く彼れらに臨むべし。然する時は、決して侮り輕んずるやうの事無きに至るものぞかし。

むかし、某藩士の一女に、いご心さま行ひの優れたる人ありけり。この武士は、江戸城府にて、江戸詰なれば、丸の内に住居せり。其少女の母も、早くなくなりて、祖母と父とたゞ三人、其

少女が家庭に於ける注意



外には、女中二人、若黨一人、下男一人なりき。然るに、當家の婢僕等が、少女を恐れ憚る事、主人にも過ぎたり。少女たまたま外に出で、歸り來たれば、

ソラ、阿嬢のお還りッ、ご惚て騒ぎて名々が持場々々へ走り入り、其職務を取るなり。少女は其時、年僅かに十二三歳ばかりなりき。是れを見つる某は、餘りに不思議の事に思ひ、嬢いかに賢くとも、まだ乳の臭失せざる小供なるに、斯く迄召使ごもに畏れ敬はるゝは、何故ならんこて、一日、婢女、若黨ごにむかひ。當家の阿嬢は、まことに、剛潑な方で、最早主婦の務さへ出來なざるご聞いて、甚だ感心致す。また、折々まるりて見受くるに、汝等も、大層、阿嬢には憚つて居らるゝやうじやが、

ごうして、年のゆかぬのに、左様に重しのきく事か、いかにも不思議に考へるが、ご問ひけるに、婢女先づ口を出だして、

其れは、本當に左様で、……實に感心な方です。……然し私共は、まことに窮屈でなりませぬ。斯う申しては濟ませぬが、……アノ、阿嬢は、もつご小さい時から、私共ご一所になつて、狂つたり、冗談云つたりする事は、ちつごも成さつた事は、御座りませぬ。まして、私共が、ふざけたり、くだらな事でも云つてますご、何にもおつしやらないけれごも、じつご、睨んで入らつしやいます。其れがごうも、氣味が悪う御座います。……けれごも、ちつごも、私共に無理を仰しやつた事は、無し。能く傷はつて下ださりますので、すから、

少女が家庭に於ける注意



家庭の心得

何ごも、小言の申しやうは御座りませぬ、  
ご云へば、若黨も亦其詞を繼ぎて。

實に此人の申す通りです。ま  
だ何ご申しても小  
供で入らせられま  
す。殊に御女性の方  
がごう



したものが氣兼ね  
思はれま  
すのは、全  
く常々の  
御心用ひ  
が一通り  
で無いか  
らで御座  
りませう、



ご申しければ、某もげにもごて、益々感心して歸りけりごぞ。  
又、これは近き頃の事なるが、某氏の息女は、まだ幼なき程よ

少女が家庭に於ける注意



家庭の心得

り、憐みの心深く、常に召使に對しての心用ひ甚だ道にかなへりき。或時、侍女の某に、その少女が父母某々に使を出だすべしと命じ置きて外出しけり。折柄妻なる人も、少女もあらざりける程なりしが、主人の出で行きたるあこは當家の子息たち、友人あまた連れ來たりて遊びける儘に、侍女は、事繁きに紛れて、ふと主人の命令を打ち忘れぬ。さて主婦と少女と歸宅せし頃に、やうく思ひ出だし、いかにせんと思ひて、例の情深き少女にすがりて、斯うく打ち歎きけるに、少女は自らの過ちしたる時の如く考へて、深く心配し、母に謀りて、其事は取りしたくめけるが、父にむかて、ありの儘に云ひながら、左も己が過失のやうに打ち歎きたる真心、且つは、其過ちしたる侍女にむかひて、教訓の心用ひ實に父が憤り

も解くに足り、侍女が將來の戒めともなるを得べくこそありしが、人の語りし、まことに感ずべき事なり。

朋友に對する心得

少女、家庭に在る程、朋友の來たり遊ぶ事あらば、先づ其許しを父母又は、其れに代はるべき人に請ひて、さて後に、朋友ごとくもに、復習をもなし、遊戯をも爲すべし。父母の用事多く、或ひは客來等のあるやうの時には、決して、朋友を集めて遊ぶべからず。又左様の時ならずとも、室内に於て、餘りに騒がしく、ふざけ狂ふ等の事無きやうに注意すべし。委しくは、行爲の所に云ふべし。朋友には、飽く迄、親切を盡して、其我が家に來たる時は、打ちくつろぎて、面白く、楽しく、且つ、殊に有益なりと感ぜしむるやうにあるべきも、決

少女が家庭に於ける注意



して、父母の妨げとなり、父母の意に逆ふが如き事ある可らず。又、朋友の家に行きたる時も、先方の妨げにならぬやうにご心ずべし。

某藩士何某の女、桑と呼べる少女は、まことに心ざま優れた人なりき。この少女はいかなる友達の家に至りても、其友の本人よりも、先づさきに、其父母の心にかなひて、常に其れ

の女たちに云はるゝことは、  
汝は、お桑嬢となるだけお遊びよ。彼の兒はまことに良い兒だから、汝達の爲になる、

なごいふ詞を孰れの家にて聞かざるが、この少女は、決して、友達の兩親に諷ひまたは、上手に機嫌をさるにてもあらぬを、何故に、斯く、友達の親々に褒らるゝぞいふに、

桑女は、幼き時より極めて注意深き兒にて、能く、人の心を察し、能く他を思ひやりて、迷惑をかけぬが故なりき。一日、友達と約束して、其家に至りしに、俄かに、來客ある容子にて、主婦は甚だいご間無げなりき。然るに、當家の少女は、兼ねて、母に請ひて、今日は、桑女ごともに、夕飯すべき約束をなしたるなれば、少女は、客のあるにもかまはず、頻りに、桑女を引きこめけり。されど、桑女は、來客にて、邪魔なるべしと心づかひして、友達の少女にむかひ。

私は今日は歸りますよ。そしてまた遊びにまゐりますから、近いうちに、  
ご云へば、あるじ方の少女は、左も不平らしき顔つきにて。  
アラいけない事……貴嬢、今日は夜まで入らつしやるこ





おつしやつたじやアありませぬか、  
ご問ひたるに、桑女。

左様いひましたけれど、御客があつて忙がしさうです  
もの、

されど、猶少女は平氣なり。

でも、阿母が宜つてお云ひだつたんですハ、  
其れは左様でせう。……けれど、急にお客があつて、阿母が  
お困りになるに、違い無いもの、

さて如何に云ひても、ごまらず、急ぎわが家へ立ち歸りに  
けり。後になりて、當家の主婦は此由を少女より聞きて、

御覽なさい、お桑嬢は、汝よりも年が下なんだよ。まだ十一  
にしかお成りなさらぬのに、あんなに氣がつくんだも

少女が家庭に於ける注意



の汝なら屹度ぼんやりして居るに違ひ無い。斯う云ふ  
うに氣がつきなさるから誰れにでも可愛がられるんだ。  
其れ云ふも人を思ひやる云ふ心が深いからだ、

なごく桑女の事を己が女に云ひ聞かせけるごなり。  
すべて朋友ご中よきはまごごに宜き事なれば十分に眞心をつ  
くして交はるべしご雖ごも幼き程はすべて兩親の心懸けご違  
はぬやうになすをよしごす。さりごて、まだ幼少の頃に、身體に不  
相應なる心づかひ氣がねはするに及ばず。

二 少女が家庭に於ける行爲

少女が家庭に於ける注意は前條に既に掲げり。是れより其行爲  
に就きて云ふべし。さて、幼き人に對ひて其心用ひを説き之を

能く解釋せしむるは易からずして、其行爲を指し示すは前者よ  
りも難からずご覺ゆれば、いさゝか其委しきを記し試みんごす  
なり。

少女は物の心知りそむる頃より他人に注意せられずごも自ら  
進みて日々爲すべき業務を怠らず勉めて、且つ最も規則立ちた  
る習慣に従ふべし。又時間を能く守りて、決して間違ふるごご無  
きやうにすべし。其運動をなし、或ひは、戶外等にて遊ぶ時は活潑  
なるべしご雖ごも室内に於て、大聲を出だし、呼び罵り、足音高く  
走り狂ふ等の事あるべからず。常にしごやかに、正しく立ちふる  
まふべし。戸障子の開閉もしづかにすべし。室内を歩く時は足音  
高く立つ可らず。物を持ち搬ぶ時は、いかなる品にても大切に  
て、決して荒々しく取り扱ふべからず。古人は、物を取る時には、



玉を取るが如くせよ。云はれきげに、高價なる寶玉を持ちたる時は、誰れも疎そかには取り扱ふ者無けれど、疎末なる器具は自づから左程大切に思はぬ故に、取り落とし、又は物に打ち當てなごして、瑕をつくる等の事あるなり。すべて物品を毀損しなごするは、その二度に搬ぶべきを、一度に持ち行かんごして、餘りに多く積み重ねるが故に、過ちて取り落とすことあり。又、持ちたる物は下に置きて、戸障子を開き、更に取り上げて持つべきを、片手に物を持ちながら片手にて戸を開く等の事を爲す故に、物は手よりすべり落ちてくだくることあり。又、卓上なり、棚なり、奥の方、中央等へ正しく置けばよきものを、端の方なごへ一寸載せ置く故に、知らぬ人の通りすがりに、袖ふれて打ち落とす等の事あり。大抵の過ちは多くは、其注意足らず、其爲方悪きが故に出で來ること

多きものぞかし。

身體は清潔にすべし。飲食物は適宜の量に用ひて、且つなるべく、時を定め、間食は最も嚴禁すべし。菓子果物の類は、食後に用ふべし。

危険の場所へは臨むべからず。然れども、已むを得ずして、左様の所へも近づかざるを得ぬ時は、能く用心しつとも、決して、憶病なる心を持つべからず。危険の物を取扱ふべからず。

衣服は質素清潔なるものを用ふるをよこす。其汚れ裂けたる時は、之を洗ひ繕はるべき年齢にも至りたらば、人手を借らずして、なるべく自らすべし。

己れが所持品は、叮嚀に清潔にして、且つ其置場を定め、正しく置くべし。すべての物の取扱ひは、叮嚀に靜かにすべきも、さつ



ご手早くする習慣をつくべし。部屋の内の洒掃は、なるべく自らすべし。其他も、出来得べき丈、家人の手助けするはよし。

やうく高等女學校にも入る程の年齢に及ばぐ、わが衣服の裁縫洗濯は云ふに及ばず。父母のをもなるべく爲すべし。若し召使等多き家なりとも、わが衣服はなるべく自ら裁縫するをよし。其藏め方取扱ひ方も、人手を借らずして爲すこそよけれ。料理も、母の許しを得ば、其手助けを爲しつつ、見習ひ覺ゆべし。客來の時も、母の旨に従ひて、助けまゐらすべし。家政も漸次に見習ひて、少女が爲すに可なる事より、手を下だすべし。

長者に對する行ひ

女兒幼少の頃、長者に對する行ひは、別に爲し難き事をなすべし。云ふにあらす。たゞ其心を誠にして、其行ひを正しうすれば可なり。先づ朝起きる時も、長者の我れを呼び起し給はぐ、ハイご判然返事して、直ちに起き、お早う御機嫌よう。なご挨拶して、叮嚀に禮をなし、其命ぜらるゝまゝに爲すをよし。こす。其寢ぬる時は、お休み遊ばせ。御機嫌よう。なご云ひ、其外に出づる時は、往つてまゐります。ご云ひ、歸りし時は、唯今歸りました。ご直ちに長者の前へ至りて申すべし。幼き人に爲し得られぬべき事、即ち長者の茶烟草等を召さるゝやうの時の小間使位は爲すことを得べし。其れも、あぶ無し。爲す可らずご、ごぐめ給



はぐ、決して強て爲すこと勿れ。

さて、次第に大きくなりて、高等小學より高等女學校就學時代の年齢に及ばく、漸々萬づの業も進みて、大方の事は爲し得られぬべければ、是れより追々に母の手助けをもなすべし。

某氏の女菊と呼べる少女は、早く母を失ひて、祖母の手に成長しけるが、この祖母は、性甚だ嚴格なる人なりしに、齡高くなるまゝに、氣短くなりて、其機嫌悪き時は、甲乙の見境も無く叱りつけ、時としては有りあふ物を打ちつけなごさへしければ、召使の者ごもは、殊に恐れ憚りて、避け隠れぬ斯かれば、祖母の侍婢にご云へば、誰れも聞き怖して、忽ちに斷りを云ふを常とす。然るに、この年少なる菊女のみは、一向に、祖母を忌み嫌ふ事無く、祖母いかに怒り狂へごも、意ご爲さ

ずして、やはり、常の如く、叮嚀に其所用を足しけり。ある日のこと、祖母はいつもの疝癢を立てと、そらの品物を取りては、見ゆる限りの人に抛げつけ、しけるに、菊女は、少しも驚き騒がず、品物の邊り近く、飛び來る時には、一寸身をかはしつと、火入の火なごを搔き集めて、危険無きやうに、取り片つけくり。疝氣強き人は、心の限り罵り狂へば、我れご我が力衰へて、鎮まるものなり。祖母は、やうく、に勞れて、はたご、坐蒲團の上に横たはり、尙烈しき聲にて。

菊ッ

ご孫女を呼びしかば、菊女は、ハイ、ご答へて、其前に手をつかへ。

何か御用で御座いますか、

少女が家庭に於ける行爲



ご問ふに、祖母は空嘯きながら。

其所此處の物を早くさつさご片づけ無いか、

此勝手なる命令に、菊女は少しも逆らはずして。

畏こまりました。

云ひさま立ちて、かひなく、しく、襷引きゆひ、裾端折り品物は、

傍らに搬びて掃除を爲し、雑巾をかけ、清潔に拭ひ清めて、品

は、一々にもごくに据ゑつけ、碎けたる茶碗、缺けたる盆は、

そつご取りて、勝手の方に持ち行きぬ。斯くて、再び祖母の傍

りに來たりて。

祖母様、もう手が透ましたから、お摩りを致しませうか、

祖母は、なほそつけ無く、ム、ご答へて、足腰をさすらせ

ながら、すやくご眠りけるが、一時間餘り立ちて、靜かに目

をさまし、更に孫女の菊を呼びけり。菊女呼ばれて、何事にか

ご祖母が用事を伺へば、祖母は、最前の容子ご打つて變りて、

端然ご席を正し、且つ聲を和らげて。

菊や、ゆるしてくれや、

菊女は、其始め、祖母の荒れ狂ひたる時は、更に恐るゝ氣色も

無かりしに、此優しき聲に、却りて、恐れ、慎める色を顯し。

恐れ入ります。祖母様、なぜ私に左様な事を、

祖母は、ますく、恥づる色あり。

いやノウ、汝の堪忍強い、そして、孝心の深いのに、感心した

よ。私も、年がよつての、つひ氣が短くなつて、怒らずともよ

い事に、怒つて、手荒な事をしたのに、汝は能う辛抱してく

れた。然し、の、瘡癩は、一種の氣違ひじやによつて、以來

少女が家庭に於ける行爲



慎つとしまうごは思おもふが若わしも私わたしが再またび氣違きちがひを起おこすやう  
 な事こともあつたら、ごうぞ彼方あちらへ往いつてくれ。そして後あとで私わたし  
 を諫いばめておくれ。其中そのうちに私わたしも負おうた子こに教おしへられて、淺瀨あさせ  
 も渡わたられよう。ナ、若わし打ぶつゝけた物ものがあたつて、輕我けが  
 でもするご悪わるいから、  
 狂人きやうじんご自みづから知しりながら、猶人なほひと事のやうに、疝癢かんじやく起おこす時ときの注ちゆう意い  
 を云いひ聞きかせたる、をかしき詞ことばも菊女きくぢよはなかくに、いごほ  
 しくも悲かなしくも聞ききつるぞやさしき。  
 イ、エ、お年寄としよりの祖母おばあ様さまに、お腹はらを立たたせ申まをすのは皆私共みなわたくしども  
 が悪わるいので、アノ……其それに、  
 ご涙聲なみだごゑになりて。  
 祖母おばあ様さま、貴婦あなた、お案あんじ遊あそばすな。貴婦あなたがお抛なげ遊あそばすものは、

ちつごも遠方とんぱうへはまゐりませぬ。そして、見當けんたうが狂ちがひます  
 からちつごも、身體からだには當あたりませぬ。そして、祖母おばあ様さまはすぐ  
 勞つかれて止とめておしまひなさる。……一昨いっさく年ねんあたり迄までは、ま  
 だお力ちからも強つよく、お勞つかれも少すくなかつたのに、……だから、祖母おばあ  
 様さま、疝癢かんじやくをお起おこしなされてはいけませぬ。お身體からだに屹きつ度障どさば  
 りますから、

涙なみだの眼めにじつご祖母おばあ様さまを見上みあげて、其皺そのしわめる顔かほを打うちまもり  
 つく、行末ゆくすゑ短みじかき老人らうじんのこころを心こころぐるしがりたるさまに、さす  
 が剛氣がうき我儘わがままの祖母おばあ様さまも、氣和きやはらぎて、さめく、ご泣なきぬ。覺おぼえず  
 も、この可憐かれんなる孫女まごを搔かき懷いだきて。  
 實じつに、面めん目無めないよ。……私わたしもこれから氣きをつけませう。  
 子こ、子こ、ごうぞ案あんじないでおくれ、



至誠は人を動かせり。この少女が優しき行ひに化せられて、老母が疝氣は、漸々に薄くなりぬこかや。

兄姉に對する少女が行ひも亦父母祖父母に對する行ひも格別かはる事無かるべし。但し兄姉は父母たちに比べては、年齢も若く、世の經驗を積むことも亦甚だ多からざるべければ、やともすれど、年少の弟妹に對して、爭論等をもなし、心安だてに無理云はるゝ等の事もあるべけれど、少女は之に對して、決して、口返答あらくかになし、又は不平、不満心のふるまひ等なすべからず、女子は長じては、大抵他人の家に往くべきものなれば、其小姑たちに對ひての心づかひ、行ひ等、先づ何よりも耐忍の力を能く養ひ置きて、是れらの人ご睦じくなし、己れ彼れらに信ぜられて後、諫むべきは、諫め正すべきは正して、清き家庭を形作るべきなり。され

ば、其幼き程、骨肉の兄姉に對して行ふ所、能く道にかなふ様ならでは、決して、將來の好果も覺束無かるべければ、年少の女兒は、兄姉に對して、柔順謙遜の行ひ甚良からんことを期すべし。

某家に、女子のみ四人の同胞ありて、この四人目の女兒は、極めて、順良の女兒なりき。其姉に事ふるさま、まことに、弟妹の手本とするに足るものありと、誰れもく、褒めぬものごては、あらざりけり。この少女、常に能く姉の手助けをして、まめく、しく立ち働けるが、或日、三人の姉は、友達と約束したりきて、朝早きに、家を立ち出づる時、妹にむかひ。

汝、お氣の毒だけども、今朝つひ、寢ばうをして遅くなつたから、私達の居間を掃除して置いておくれ、少女はいつもの事なれば。





畏まりました。……早く往つて入らつしやい、

姉達を送り出だして、直に掃除にかくらんさせしに、母の今日は、汝一人留主居にて、氣の毒なれば、ある所へ連れ行くべし。あるを背きかねて、母の伴道して、他出せり。さて、歸宅するこやがて、姉の歸らぬさきに、こ心せきつと、大急ぎにて掃除する所へ、姉達歸り來て、此容子を見て不平らしく。

あらマア、嫌な人だよ。私達があんなに頼んだのに、……そして、あんなに、受答つて置いてさ。……今頃掃除するんだもの、コラ、こんな塵埃が立つてしかたが無い。三人ごもに、小言を云ひて、妹を睨めつけくれごも、妹は更に悪き顔つきもせず。

姉様、本當に濟みませぬ。御免遊ばせ、

少女が家庭に於ける行爲



何の云ひ譯もなさぬ妹に、姉はなほ小言を續けて。

出来なきア、出来ないつて云つておくれが宜いは、……夕  
方になつてはたきの音なんか見つとも無い。……汝は、餘  
り人に褒められるもんだから、近頃は、大分お天狗になつ  
て姉を馬鹿にするんだよ、

此詞に、さすがの妹も悲しくなり、涙聲に力を入れて。

アラ、あんな事、決して、姉様方を馬鹿にするなんて、……  
……其れは餘りです、

云ひつるが、其れさへ云はねばよかりしものをご、忽ちに  
心づきて。

姉様、ごうぞ、御免遊ばせ。一寸彼方へ往つて、御休み遊ばし  
て下ださい。今直に掃除をしまひますから、

母は廊下を通りながら、此姉妹の問答を聞き、また始まり  
たりと思ひ、姉達を呼び、今日外出の事を咄し、其不心得を  
叱りぬ。さてある時、ある人の來て、この母親に。

末の令嬢は、まここに感心な方です。子エ、實に世間の褒め  
者です。……あく云ふ方は、必ず、天の恵みを受けて、行末  
は、御幸福が來るに違ひ無い、實に敬服です。

云ひけるに、母は苦笑ひして。

仰せでいたみ入ります。……が妹は幸福でせうが、姉達は  
不幸でせう妹が褒められるだけ、姉が誹られるのです。同  
じ同胞でも、ごうしてあく違ふものです。か、  
ご歎息したるに、客はげにもご思ひて、再び詞を發せざりき  
ごぞ。



少者に對する行ひ

年少の女子が家庭に於ける少者即ち其弟妹甥姪女に對する行ひは前に云へる心得と同じく、いかにも親切にあるべし。この善行を見習ふ時は、姉妹ごも亦必ず善行の人となるべし。これに反して、悪事を幼き者の眼に觸れ、耳に入らしめ、又は残酷に取扱ひなごする時は、彼れらはまた大抵、悪しき人となるものにこそあれ。されば、同じ所に住み、同じやうに起き伏し、睦みあふ同胞の如きは、殊に先づ其齡長じたる人より注意して、年幼なき者ごもを善き方に導くべし。己れが氣にかなはぬ事ありて、濫りに弟妹等にあたり、無理を云ひ、又は苛く追ひ使ひなごするころは、くれぐれも爲すべからず、常に少者を愛育し、其まだ知らざる

ここは懇ろに教へ、善き事あらば褒めて、ますく道に進むやうにし。悪しき事あらば、靜かに戒めて、其過ちを復た再びせざるやうにせしむべし。父母の年少なれば、こて、弟妹を己れよりも愛し給ふやうの素振ありごも、決してつゆばかりも嫉みがましきふるまひあるべからず。されば、弟妹の父母の恩になれて、不遜の行ひ等あらば、よくく諫め正して、自ら省み謹むやうにしむくべし。誠は何者をか感ぜしめざらん。始めこそあれ、其姉なる人の眞心より之を矯正せば、つひには、弟妹も其徳に化して、善良の人となるを得べし。

殊に、弟妹は我れより後に生れたるなれば、老少不定の理りある世は云へ、順より云へば、父母ごくもに、此世に在る事の、我れよりも短かくるべければ、互ひに愛し愛せらるゝ情も厚かるべき

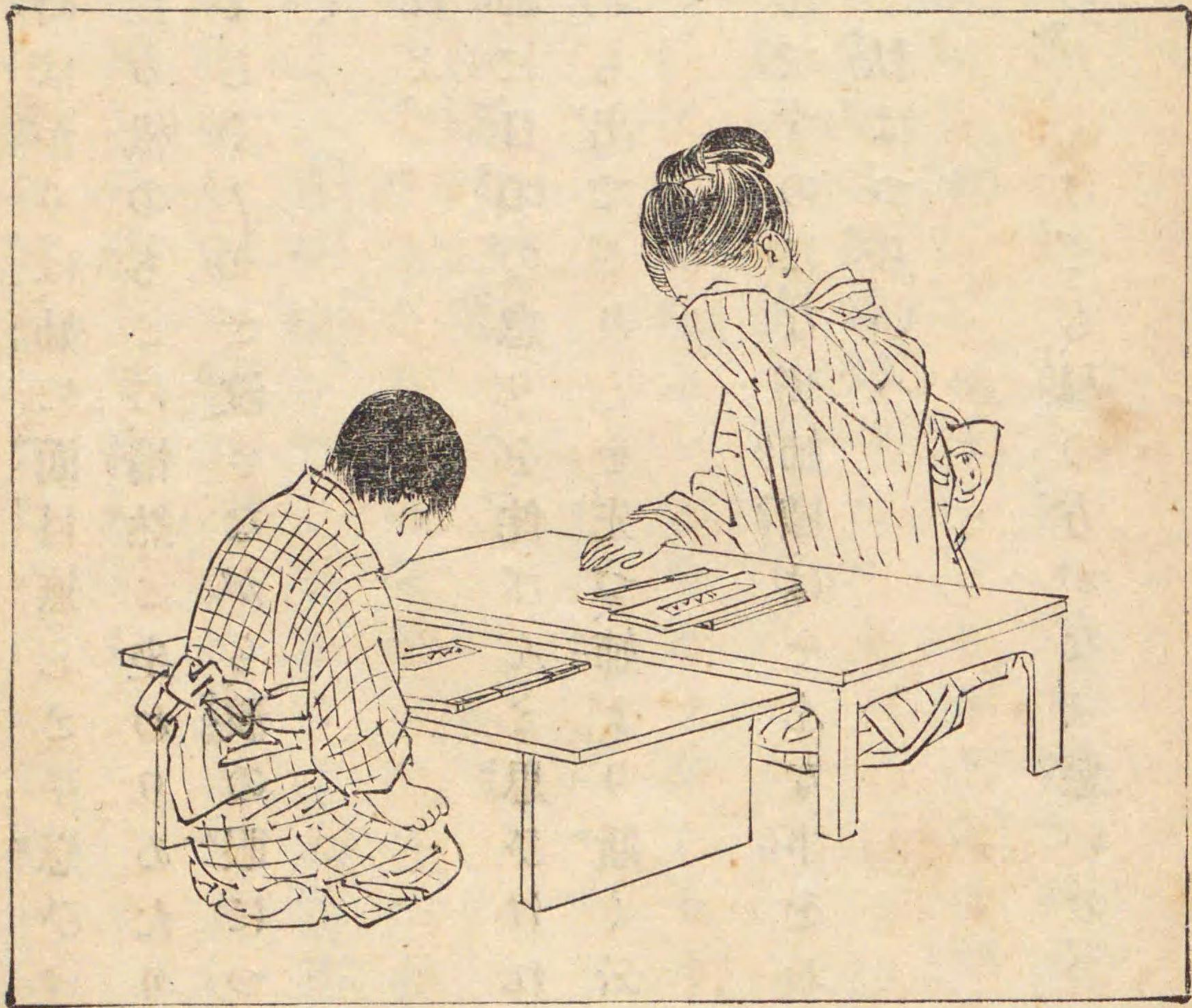


道理なりと思ひやりて、かへすくも同胞の中に嫉妬がましき事、つゆほごもあること勿れ。毛利元就が死に臨みて兄弟に箭を折らしめられし古事をも思ひ合はせ兄弟中よくして父母の心を安んじまらすべし。

ある所に貞女と呼べる女兒ありき。貞女が十三四歳ばかりの時、即ち明治七八年の頃なりしかば、各地方にも小學校の設け初めて出来しかば、貞女は、幾度も父母に懇願して、やうく、今年八歳になりける弟ごとくも、小學に入ることを得たりき。然るに、姉の貞女は、性質賢く、且つ學問を好むこと大方ならねば、校内の評判も甚だ宜しく、いつも第一の席を占めけり。さるを弟は、姉に似ず、身體も虚弱なる故にや、兎角に學問を嫌ひて、怠惰なる性なりければ、試験に近づく頃には、

いつもく、姉の心配中々一通りならず。やうやくにして、第三年目ばかり迄は、ごうやらかうやら、落第もせざりしが、第四年といふ年、さらでだに成績悪き弟は、不幸にも、重き風邪にて二三週間引き籠りたれば、其年の試験には、つひに、落第の不幸を見るに至

少女が家庭に於ける行爲





れり。さすがの弟も、是時ばかりは、姉に面目無しこや思ひけん。差しむかひに据ゑたる机のもごに、悄然と坐わりたり。姉も、机に臂を持たせて、しくく泣きながら、涙の眼につくく、ご弟をまもりて。

坊やゆるしておくれよ、

弟は驚けり。我れこそ、姉に、日頃の怠りを侘びんご思ひければ、面目無さに、急には詞も出でざりしを、先づ、姉より斯く云はれて、ますます、**狼狽**へ。

姉様……私が悪いんですのに、なぜ、姉様はそんな事をおつしやるのです。……私はずらいハ、

姉は再び。

其りア子、汝も悪いの。……けごも私の方がなほ悪いの、……

……だから私は汝に過るんだハ、……アノ先生が子、自分が悪い事があつた時には、弟にでも、妹にでも、亦下女にでも過らなくては、いけないご御爲仰つたから、  
弟はいよく、不思議に思ひたる顔つきにて。

でも、私の落第したのに、なぜ姉様がおあやまりなさるんですか。

されども、姉はますます、**前説**を主張して。

其れも、先生が左様おつしやつたの。汝は聞かなかつたかい。……ア、左様、其れは子弟や妹の悪くなるのは、大低、其手本ごならなければならん、兄や姉の行ひが悪ので、其れを年少の妹や弟が見習つて悪くなるんだつて、  
斯く云ひ出で、姉はまた涙をはらくく、ごこぼし、暫時は何



事もえ云はざりしがやとありて。

だから私はもうござうして明日先生にお目にかくらうと思ふの。そしてこれから阿爺や阿母の所へお佗びに往かなくてはならないけれど何と云つてお佗びしやうと思つて、

いかに年少の弟も何ごてか感じ思はざらん。いか程怠惰なる性質の者もいかでか志しを起さざらん弟は何事も云はず。じつと己れが机を見つめ居りしが。

姉様ごう考へても私が悪いんです。……だつて姉様があるに心配して教へて下ださつたのに私がなまけたから其れで落第しツちまつたんだハ。……これからは屹度勉強しますから免して下ださいよ、

此度こそはこの弟の心から佗び入りたるさまの見えけるに、姉は心に深く悦び。

本當かい。く、ござうぞ勉強しておくれよ、弟も詞に力を入れて。

屹度です。……是れから屹度勉強します。

げに弟もこの誓ひの詞に背かず其れより後は一生懸命に勉強しければ、一際眼に立つばかりの上達をなして、其次の年には第三番目の席を占めて及第しけり。まことに此姉なかりせば、此あはれなる弟は、遂に怠惰習慣つきて善からぬ人ともなりににけんを實に同胞が友愛の情厚かりし故に、好果を得たるこそ最良かりけれ。

又ある所に、姉と妹と二人の同胞ありけり。姉は妹よりも三



歳の長にて、いづれも、毎日打ち連れて、小學校へ通ひぬ、然るに此姉は、まことに友愛の情厚き人にて、いかなる所へも、遊びに行くこと云へば、必ず妹ごとくもならず、では往かず、いかなる食物にても甘しと思ふ物は、妹に分かたざれば、食はざりき。されば、この小供の親戚も、朋友も、この姉に物與ふる時は、妹の分をも與へ、招く時は、必ず妹ごとくもに招きぬ。ある日、妹は風邪にて打ち臥しければ、珍らしく、姉一人招かれて、伯母のもごへ往きけり。そは従姉の誕生日なりとなり、其餘興に、いと面白き手づまのありしに、人々は笑ひ興じて、樂しみければ、この女兒のみは、何と無く、浮かぬ顔色の見えけるに、伯母は差しよりて、

汝、今日はごうかしたの。

ご問ひければ、貞女は、わざとらしく、ほく笑みて。

イ、エ、ごうも致しませぬ。大變に面白う御座います。

伯母は、なほ此詞を信ぜず。

左様お云ひだけれど、何だか沈んでおいでなもの。

貞女は、再び斯く伯母に問はれて。

では申しますが、今夜こんな面白き事を見せて戴いて、本當に面白いと思つてました。其れにつけて、妹がまゐりまして、これを拜見したら、ごんなに悦ぶだらうと考へ出しました。左様するに、今頃は、若しや苦しがつて居やアしないかしら、私が留守で、嘸淋しがつてるだらうと思ひ出しましたので、實は、急に家へ歸りたくなつたんです。れども、先刻、宅を出る時、阿母が呉々おつしやつたんです。



家庭の心得

アノ妹いもうとご一いつ所に往ゆかないつて、つまらなさうな顔かほをする  
 事ことはならぬ。また折角せつかく伯母様おばさまが呼よんで下くだださつたんだか  
 ら、迎むかひをやる迄まで、歸かへつてはいけないつて、……其それに、つひ  
 私わたくしが妹いもうとの事ことを思おもひ出だして、いやな顔かほを致いたしまして、本當ほんたうに  
 悪わるう御座ございました。伯母様おばさまごうぞ免ゆるして下くだださいまし、  
 伯母おばは貞女さだめよが妹いもうとを思おもふ友愛ゆうあいの情じやうの厚あつきを、また今更いまさらの如ごとく  
 感心かんしんして。

ア、ごうも、汝おまえの妹いもうと思おもひには感心かんしんするよ。妹いもうとが寝ねて居ゐるつ  
 て案あんじるのは最もっともだ、實じつに左様さやうあるべき事ことだ。もう宜よいか  
 ら送おくらせて上げるから、お歸かへり、そして妹いもうとの好すな物ものを、汝おまえの  
 歸かへる時とき持もたせて上げようと思おもつて、包つんで置おいたから、持も  
 つてつておくれ、



少女家が庭に於ける行爲



貞女は左も嬉しさに、伯母の顔を見上げて、恭しく手をつかへ。

有難う御座います、

こは云ひたれど、歸らんごもせねば。

サアお出で、一寸送るやうに左様云つて上げるから、

此詞を聞きて、貞女は。

其れは有難う御座います。……でも私はもう少し待つて

ます。迎への来るまで、……阿母のおつしやつた事を背い

ては濟みませぬから、

伯母も、これに同意して。

左様さ。其れも左様だ。もう今に迎ひが来るだらうから、

本當に子エ妹に親切なくらゐな。汝だから、そんなに母の

云ひつけも、大切に守るんだ。ごうも良い心がけたから私

も汝の云ふ事に賛成しやうよ、

程無く貞女が迎ひの者も來たりしかば、伯母は殊更に、いろ

くの物を持たせて、妹のもごへやりけるにぞ、貞女は、我が

貫ひしよりもいたく悦び、勇みて、己が家路に急ぎけるこそ。

まここに感心なる少女が行ひにこそ。

ある人、ある村の鎮守の祭り、在りけるをり、田の畔に添ひた

る道を過りけるに、年十歳ばかりなる愛らしき少女の弟に

やあらん。四五歳にもやと見ゆる男兒の手を引きて、走りけ

る程に、男兒が草履の鼻緒きれて、泣き出だしけるを、慰めす

かしながら、そこらに在りあふ藁のしべもて、緒をすげたり。

斯くて數十歩走る中に、小供の手して、疎そかに、すげとん鼻



緒は忽ちに抜けて、男兒は泥土へ足を踏み込み、わつと泣き出だしけるを、少女はいたはり慰めて、小溝に足を洗はせ、汚れたる草履の泥を拭き、またも藁を探して、鼻緒すげり。兎角する程に、同行の小供も、大鼓の音に心浮されて、遙かに鎮守の森の方に走り行きぬ。少女は、さすがに己れも速く行きたしと思へるにや、打ち涙ぐみたりしが、忽ちに打ち泣き居る弟を見て、笑顔をつくり。

お泣きで無いよ、好い兒だから、今姉様が背負つて往つて上げるから、

小さき背を押しむけて、やう／＼に弟を背負ひ、何やら云ひ慰めながら、汗もしこくに走り行くさまの、いかにも親切に見えて、可憐に覺えければ、立ち寄りて、其子の名を問ひ、茶見世

の菓子を買ひて與へなごして後、同村の者に聞けば、こくらに聞えたる弟思ひの女兒なりきこそ。是れも亦いご感ずべき事なり。

召使に對する行ひ

少女が父母の膝下に在る程、其召使に對する事は、既に先條に云へるが如し。さて、其行ひは、いかにも親切なる中に、犯し難き威は備ふべし。彼の毛利元次が少女の行爲のやうにこそあらまほしけれ。されど、ゆめ／＼我儘のふるまひをし、無理を云ひ、酷く追ひ使ふ等の事ある可らず。

某家の愛女は、幼少の頃より、至りて惠深く、行ひ正しき人なりけり。ある日、某家の主人が友人某の行きて、この少女が行



ひを心こころも無く見みてありしに下婢めしづかひの一人少女せうじよが居間ゐまの椽せん側がはを過すぎける時とき一寸いっすん屈體くつたいして行ゆくさまのいかにも小主人せうしゆじんに對たいする行儀ぎやうぎこしては正ただしく最良さいりやうじく覺おぼえければ眼めをこめて尙能なほよく見みてありしに少女せうじよは優やさしき聲こゑにて。

竹たけや今用いまもちがあるかい、

下婢かひはたすきをはづして椽側せんがはに手てをつかへ。  
 イ、エ。もう濟すみました所で御座ござります、  
 此答こたへを聞きくこやがて少女せうじよは机つくえの上うへなる一封いっふうの書狀しよじやうを取とり出いだして。

御苦勞ごくろうだけごも一寸いっすんこれを出だしておくれ、  
 是時このとき奥おくの方かたにあたりて呼鈴よびりんの音響おとひびけり少女せうじよは耳みみをそば立たてと。

あら奥おくで呼よんで入いらつしやるやうだよ早く往いつておくれ其それは後あとで宜いいから、

下婢かひは斯かく云いはれたれごも猶なほ少女せうじよが用もちを足たさんごして。  
 何なに御嬢様おぢやうさま宜よろしう御座ございますよもう屹度きつど松まつがまゐりまし

たに違ちがひ御座ござりませぬから、  
 云いひ捨すてく其書狀そのしよじやうを持もちて走はしり行ゆくを少女せうじよはなほ不安心ふあんしんさうに打うちまもりたりしが。

ア、左様さやうだ。私わたくしが  
 ご獨語ひとりごとして己おのれは立たちて奥おくの間まなる祖母そぼにやあらん。伯母おばにやあらん。老婦人らうふじんの居間ゐまに至いたりぬ。客きやくの某はなはなほ心こころをつ

て之これを伺うかへば少女せうじよは老婦人らうふじんにむかひて。  
 何なにか御用ごもちで御座ござりますか、



ご問ひけるに、老婦人は。

何もう宜いよ。松が來ましたから、

少女は、これを聞きて。

ア、左様で御座りますか、

徐かに立ちてもこの部屋に還りぬ。客は尙主人の歸宅を待

つ程、客室に在りて、下婢の竹が更に茶をすくめんこて、出で

來たるを呼びこめ、少女の上を聞きたさに、先づ世辭の口義

を爲しつゝ。

ごうも憚り、……お構ひなさるな。……時に、御宅の阿嬢は、

大層學藝が宜くお出來成さるさうだが、お年齢はおいく

つ、

問はれて、下婢は、左も得意らしく。

ハイ、お嬢様ですか、お年齢は、まだやつこ取つてお十五に

お成りなさるので、其れは、良いお性行でして子。

學校の先生や何か、大變に褒めて入らつしやいます、が、學

藝が宜くお出來なさるばかりではありませぬ。お心だて

が、其れは、お優しく、而して、恵み深い方なんです。

斯う申しては何ですが、主人公は、ちとお酒の上が悪

いし、奥様は、お人が好いばかりで……私共も、随分困る事

が御座ります、けごも、お嬢様が、其れは能く勞つて使つて

下ださいますので、……時々はお暇を願はうか、存じま

しても、お嬢様の事を考へるこ、やつぱり往きたく無い心

持が致しますの。……で、誰れでも、お嬢様の御用ご云ふこ

何は措いても、直ご致すのです。車夫でも馬丁でも、……其

少女が家庭に於ける行爲



癖冗語一つおきく成さらぬのですから、恐れては居ますのですけれど、ごも……アノ調子で御勉強になりましたら、ごんな立派な方にお成り遊ばすか知れませぬ、

下婢の竹が問はず語りに、客はますく耳を傾け。  
 ハア左様か、其れは實に感心な事……而して、ごんな事が、  
 汝達の、其れ程感心する點かい、  
 下婢はますく得意顔にて。

其れは、旦那様、ごんな事ツて、一々數へれば、ごても、お咄申切れませぬ。……けれご、マア、此間も、車夫が、お庭のお掃除をして居ました時、疎忽を致しまして、お植木鉢を碎しましたの。其時、お嬢様は、お椽側に居らつして、水を汲んで来ておくれご、仰しやつてたんです。……所が、車夫は、旦那様

の御秘藏の品を碎したんですから、びつくりして、先づお嬢様のお側へ飛んでまゐつて、お嬢様、ごう致しませう、アノお植木鉢を碎はしましたが、ご申しますご、お嬢様は、何にも仰しやらないで、困る子、先づお待ちよ、ツて、旦那様の所へ入らつして、車夫が不調法したのは、全く自分が喧ましく云つて呼び立てましたものですから、惚てく驅けてまゐつて、つひ躓づいて碎しましたので、實に私が悪う御座りましたんですから、ごうぞ、今度の所は、お免し下下さいませ、ご泣かぬばかりに申して、御侘び遊ばしたんです。其れで、旦那様も、外の方の仰しやる事だご、中々お聞き成さらぬけごも、お嬢様のお詞ですから、ごうくお聞き入れに成りまして、以來氣をつけるが、宜いご云ふ位な事で



濟みました。其れから、お嬢様は、車夫をお呼びになつて仰しやるには、人は、誰れでも、不調法をしたくてするものは無い。これは過ち云ふものでしかたは無いけれども、凡そ過ちは、これぞ一大事。心得て、注意に注意をした時には、出来るものでは無くて、屹度注意の足らぬ時に出來たものである。私がつひ、汝の用をして居た所を、氣がつかずに呼び立てたのが、第一不注意で、甚だ善くなかつたから、其れは阿爺にも能くお詫び申した。が、汝にも改めて詫びる。……けごも、汝も是れからは、一層氣をつけて、御主人の品物を取扱ふ時には、疎そかにせぬやうにせねばならぬ。世に、奉公人根性なご云ふ、さもしい詞があるが、其れは、實に恥かしい嫌な事じや無いか。人に召使はれて居る者

は主人の物は他人の物だから、悪くなつてもかまはぬ。云ふ様な氣風がつひ、習ひ性となつて、物を疎末にする癖がつくと云ふ事だ。……であるから、左様な善からぬ風に染まなないで、彼の人は、何某の家に奉公して居たから、ごうも身持が違ふ。感必だ云はれるやうになつて、他日には、立派に家を構へられるやうになつておくれよ。年齢も往かない癖に、生意氣だなんて思はないで、能く私の云つた事を考へておくれよ。袖ふり合はすも、他生の縁といふ言があつて子。この廣い世界に生れ出でた、多くの人と人との中で、たつた五人や十人が、斯うして一つ家の中に住んでる。といふは、能く、縁であるから、私も決して汝達を、路傍人とは思はぬから、心に思ふだけの事を云ふ



んだから子。ご仰しやつた時車夫は、たゞハイ、ご云つて段々に頭を低く下げて居ました。が、しまひには、ほろ／＼と涙をこぼし出しました。私もお側に見て居て悲しくなつたんです。其れが、貴下、平常が平常です。から子。お嬢様は、其れは、お惠深く、何でも、お取りなしでもつて、お手當や何かも、餘計になるんです。から、しみ／＼身に染みて有難いと思つたんでせう。ご存じました。……旦那様、こればかりでは有りませぬ。まだいろ／＼なお感心な事があるんです。……これは、つひ此間の事なんです。下婢は語り終りて、つく／＼と、又今更の如く感に打たれたるやうにぞ見えし。其客人は、其れを友より友に語り傳へたりき。然るに惜むべし。この少女は、其以前より、肺患を煩

ひ居たりしが、超えて十八歳といふ年に、あたら、苔の花を、無常の風に散らしたるぞ、かへす／＼も悲しき事なる。然るに、この葬送の日には、親戚知友のいご惜みて、慟哭せしは、云ふも更なり。車夫馬丁、出入の牛乳配りに至る迄、たゞわい／＼と前後不覺に泣き叫びつゝ、棺を圍み送り來たりて、埋葬はてとも猶還らんともせず。其中には、なぜ、こんなお嬢様を殺したんだ。なご／＼聲をあげて呼ばくりし人さへありき。ア、虎は死て皮をこぐめ、人は死して名をこぐむるごか。命數は天なり。またいかに、ごも爲べきやうなれば、僅かに、十八歳の少女、歿後に至りても、人の忘るゝ事能はずして、可憐らしご思ひる心いご深く、つひには、物の本にも、それが傳記を書き寫して、少女が手本ごさへにせらるゝを見れば、徒らに、



家庭の心得

云ひがひ無き齡を長く有ちて世の場所塞げさいはると痴者に比ぶれば實に天地の違ひよりも甚しきこそは云ふべきなれ。

右に載せたる少女が善き行ひとは反對なる少女あり。こは、いご忌はしき事ながら甲乙を見て彼れ是れ照らし考へなば好き戒めとなりぬべしとて左に記しつ。

ある所に一人の少女ありけり父は早く歿して母一人子一人と云ふ淋しき家庭に成長りたるにこの家は富裕にして召使も多く何不足無きに母はたゞ旦暮亡夫の忘れ形見ぞと大切に育てたるはよけれど餘りに鐘愛に溺れて少女の云ふ事さへ云へば何事も背く事無かりしに少女は天下に己が欲する事は何一つこして行はれざる事無しと小供

心に思ひ募りてはつひに非常なる我儘者となり濟まし果ては殆ど狂人の如きふるまひさへなすに至れりある時母が友達の某婦人無沙汰見まひに行きて母と物語りしてありける程奥庭の方にあたりて人の叫ぶ聲聞えて忽ちばたぐと此方へ走り來る足音聞えつ心も無くて窓の障子の開きたる所より彼方を見やれば年齢十四五歳ばかりの覺ゆる少女の手には花鋏を持ちて一人の婢女を追ひ來るなり追はると婢女は髪ふり亂し顔よりは血さへ流れ出でたるに少女はなほ狂人の如く荒れに荒れてつひに持たたる鋏を投げつけたるが幸ひにして狙ひはそれて遙かの村へ落ちたり婢女は客のあるをも覺えぬさまにて。

奥様ッ

少女が家庭に於ける行爲



ご呼びながら、椽側に飛び上りぬ。母なる人は、さすがに我れに對して恥かしさや思ひけん。

御免遊ばせ、

ご左も落ちつきたるやうに云ひなしては、坐を立ちたれども、其時主婦の顔は、はや蒼白く成りて、餘程恐れを懐き居るやうに見えたり。客の婦人は、兼ねて聞きたる、我儘女の事、今更に驚くにはあらねど、さりとは、女に似げ無き酷きはざよご、心の中に爪弾きをなし居たり。然るに、今一人の婢女が、これを取りおさへんごて、少女がほごりへ走り寄りしを見て、少女は忽ちに怒りをうつし。

何だい……邪魔だよ、

云ひさま、拳をあげて、其婢女の顔をはつと打ちたるに、これ

もアツと叫びて飛び退きぬ。少女は、なほ前の婢女を追ひつくと、母の居るにも、眼をかけず。さつと走り行けごも、母は其れをこぐめんごもせずして、却りて傷ける婢女を引き退け、なほ小聲にて。

早くお逃げよ、早くよ、

婢女は、急ぎ宅へ走り入りて、何處ごも無く退れ去れり。母はなほ荒れ狂ふ少女を立ち迎へて。

嬢や、ゆるしておくれ。久がまた何か氣に逆らつたかい、少女は顔をふり動かして。

阿母いけないく、久を逃がしてはいけないく、母はますく笑顔を作りて。

何、逃がしたのじや無いよ。マア此方へお出で、

少女が家庭に於ける行爲



客無き方へ連れ去らんこそすれども、少女は更に聞き入れず。

いやだ、阿母いけな、

怒り泣きに泣きむづかるを、すかし兼ねたる母は、侘ぶるが

如く、さまざまに云ひこしらへて、やうくの事にて、奥の方

へ連れ行きけり。後に、當家にしばらく奉公せしと云ふ婢女

の、他家に移り居たるが、其當時の事を語り出だして。

奥様、彼の時は、無お驚き遊ばしたでせう子エ。けごも、彼所

では、あんな事は、毎日のやうにあるので、御座います。お嬢

様の氣に、一寸逆らふと直に、敲かれる、抓きむしられる。物

を投りつけられる、本當に一つ間違ふと死ぬやうな目に

遇ふのです。其れですから、彼所では、お給金や何かは、外よ

り倍も多いんです。すけれども、三月と辛抱して、る婢女はあ

りませぬ。……ですから、お嬢様の事は、奉公人が誰れ一人、

蔭では名を呼ぶ者も無くて、鬼娘々々こばかり申します

の。……けごも、本當に鬼のやうな、恐ろしい心では無いの

で。たゞ大變に我儘で、而して、疝癢が強いんです。疝癢紛れ

には、人も打つ。酷い目に遇はせるのみならず、自分で自分

の身體を引つ搔いたり、打つたりして、傷をつける事さへ

あるんですもの。……其れで、みんなが引つ搔かれた所へ、

膏藥を張つたり、打たれた傷へ、繃帶をしたりして居るこ、

時々、お嬢様は、氣の毒さうに、其顔をのぞき込んで見て、

汝、傷いかい。御免よ。なんて、持てる物を下ださつたりす

る事もありますから、彼れは、心からの悪人では無いのに、

お氣の毒な事です。……餘り、阿母が、お愛がり過ぎ成され



たので、ごんだ狂人にしてしまつたんです、  
 ご語りたるよし、其婦人が物語りたる前の少女、後の少女  
 ごが召使に對する行ひを比べ見よ。まことに雪ご炭ごの違  
 ひあるが如くにて、一方は其少女あるが爲に、召使ごもの、其  
 家に事へん事を欲し、一方は其少女あるが爲に、事へざらん  
 事を欲す。人は善きご悪きごによりて、斯くも重んぜられ、敬  
 せられ、且つ愛せらるるご否ごあり。彼れ是れに鑑みて、能く  
 其己れを慎しむべし。  
 又、某家の少女は、同胞いご多くありしかば、年齢六ツ七ツご  
 いふ頃より、一人の婢女をつけられて、すべての世話は、其婢  
 女が手一つに爲す事なりしが、斯かるありさまなれば、少女  
 は、父よりも母よりも、亦他の同胞よりも、深くこの婢に親し

みけり。さて、年月経る程に、兄は妻を迎へて、別の家に住む  
 事ごなり、姉も他へ嫁して、今は、この少女が、同胞の中の長者  
 ごなりぬ。然るに、傳の婢は、たゞ己れが育てし少女のみを主  
 の如く心得、他はみな他人の如き思ひを爲して、何事も、お嬢  
 様々々ご云ひて、少女一人の爲のみを計り、又己れが心にか  
 なはぬ事なれば、父母の事にて、同胞の事にて、みな悪さ  
 まにこの少女に云ひなせば、少女亦、婢ご親しみの深きまゝ  
 に、骨肉の云ふ事よりも、婢の云ふ事を信じ、萬づ正なきふる  
 まひのみ増りもて行けば、兩親も、これを憂き事に思ひ、遂に、  
 婢女に暇をつかはしけり。少女は、父母の強てこの給ふ事な  
 れば、巴むを得ず、婢ご別れたれごも、其れより後は、鬱々ごし  
 て、何事も面白からぬさまに見え、果ては病ひの床に臥す日



さへ多くなりけるに、慈愛深き父母は、幼き頃より馴れ睦みたる婢女爲にならずて、遠ざけたれども、其れ程に思ふならば、餘義無き次第なりと觀念して、つひに再び呼び還すことくせり。さて後は、少女も、ますく心強く成りぬと覺えて、父母の命令をも奉ぜぬ事あるに至り、婢女亦いよく我意に募りて、其行ひの殊に氣儘なる始にも増りてせんすべなく成りけり。少女が、この婢女をひるきして、片落ちなる行爲のあるにより、家内常に紛々絶えざりしが、少女の妙齡に及びて、他家へ嫁する時にも、この婢女を伴ひ行きたりしが、後遂に婢女の事よりして、夫家に一騒動を起し、はてはこの女も、離別せらるるに至れりこそぞ。

是れらに就きて、なほ能く思ひ見るべし。己れが幼き時より、付き

従ひ居て、我れをいごをしみくれたる者は、縱令召使なりとも、其恩義を忘れずして、何時迄も愛顧すべしと雖も、若し其愛を過して、骨肉を躑み又は、これが箝制を受くるが如きは、沙汰の限りなりけり。年若き人は、能くこの點にも注意すべき事なり。

朋友に對する行ひ

少女家庭に在りて、朋友に對する行ひは、既に前條心得の所にも云へるが如し。古語にも、水は方圓の器にしたがひ、人は善惡の友による。こいふ事さへありて、幼少の頃は、殊に物事に移り易き習ひなれば、善き友達を選び親しみて、惡き友達には遠ざかるをよしとす。但し、學校などにては、左様の事も、際立てくは出來難き場合あるべけれど、家庭にての友達は大抵は、自ら選びて交際



ふ事を得べきなり。縦令、學校朋輩なりとも、悪しと思ふ友の家には往かず、又我が家にも招かざるぞよき。斯くても、強ひて、先方より交際を求むる事あらば、父母に申して、其指揮を受くるを得べし。

さて友達の我が家に來たる事あらば、悦び迎へて、諸共に有益なる遊戯などをもなすべし。されど己れ、其友よりも身分高く富みたる家ならんには、一層注意して、いさくかも高ぶりたる素振無く、又我儘なる行ひあるべからず。友達の家に往きたる時も、同様の心得なるべし。又我れよりも、身分高く、富み榮えたる家の子、友たらざるべからざる場合には、我れ今は、品位卑く、富裕たらずとも、何の憚る所も無し。たゞ徳の進み、學の増らん事こそ思ふべきなれど、心得て、つゆばかりも、卑屈がましき心を持つべからず。

若し先方の、富貴を笠に着て、我れを輕蔑するやうの行ひもあらば、次第に避け、遠ざかりて、左様の友とは交はらぬぞよき。されど、己れが分を忘れて、瘦我慢に誇らはしげなる行爲あるは、以ての外なり。形ちは恭うして、心は氣高からんやうにふるまうべし。友達の我が家に來たり遊ばると時、互ひに心隈なく語らひなごして、日和よき日には、戸外の遊戯に、十分、體育の助けを試むるも可なり。されど、家人の妨げとなるべき事は、決して爲すべからず。某家の少女は、天性情深き人なりき。其學校朋輩の休日には、この家に來たりて遊ぶ事なるが、其中に、少女と同年なる女兒あり。こは、極めて貧しき家の兒にて、父は、巡查を奉職せしが、其れさへ世に亡き人の數に入りぬ。母は一人の女兒と、一人の男兒とが、生ひ行末を頼みて、賃仕事をなしつゝ、細き烟



を立つるはか無き生計なれどもせめて小供の學資は亡  
 き夫の貧苦の中にも手放さざりし公債證書の利子にてな  
 ほ男女二人の子は、小學校へも通はせ置くなり當家の少女  
 は斯かる内輪の難義迄を知るよしも無けれど我が同級生  
 の中にも我れこの女兒はいつも學業の成績も品行  
 もよしと教師に褒めらるゝ同志なるに彼女とは極めて中  
 睦まじけれども他の生徒は甚くこれを輕蔑し、乞食々々  
 とあだ名附けたるは其衣装の眼に立ちて粗末なるが故な  
 り。然るにこの惠深き少女は、そをいごほしき事に思ひ母に  
 請ひては半襟其他の物を贈るに女兒亦家の掟厳しきもの  
 と見えて、始めの程は固く之を辭退し。  
 お友達から物を戴いて歸ると阿母に叱られますから折



少女が家庭に於ける行爲



角ですけれごも、

ご云ひて更に受けざりしが段々に互ひの心も知り合ふに至りて、この少女が贈る物ばかりは、快く受け納むる事はなりぬ。ある日、例の如く、少女の宅に、同級の生徒集まりて、遊び居たるに、一人の女生徒。

アノ子。私の先生が子。……次の休日には、瀧の川の紅葉見に連れてつても宜い。往きたい人は、明日中に、左様いつてお出で。御爲仰つたの、貴嬢お出でなさるの、

斯く、甲の者より、乙の人に問へば、乙より丙に云ひつぎつと、あり合ふ生徒の過半は、先づ此行に賛成せり。其時、甲は更に乙の顔を見て、且つ例の貧しき少女を一寸見かへり。  
貴嬢は、

ご左も輕蔑らしく問へば、少女。

私はまゐりませぬ。折角ですけごも、主人の少女は其れご悟りぬ。僅かの費用にても、母に請る事を厭ひて、爾云ふにこそ、我れ我が母に請ひて、竊かに助けやらんご思ひければ、そつご眼くばせして。

お何嬢も入らつしやいよ。子、子、阿母には私から願つて上げますから、少女は顔打ちあかめて。

有難う、……ですけごも、お休みの日には、ちつご用があり  
ますから、  
甲はこれを引き取りて。

ア、左様よ。……お何嬢は子。日曜には、

少女が家庭に於ける行爲



くつく〜ご笑ひて乙を見やれば乙は丙の顔を見ながら。

左様よ。子、子、

丙は更に口を尖らして、而して、殊更に小さき聲をして。

私達の穿く麻裏の鼻緒を縫ふお手つだひを成さるの、

三人は、わざごらしく、くつく〜ご笑ひ出せば、あはれな

る少女は、さしうつぶきて、そつご涙を拭ひぬげに、情ある人

は必ず勇ありごかや、愛憐の心深き少女は、又義侠の氣に富

めりき、親に孝にして、爾も、學術優等品行方正なる少女を、斯

くも、輕蔑し、擯斥する心穢さよご憤り胸に溢れて、顔もうる

みぬ。

皆様、其れは何を御爲仰るのです。……私共は、日曜日だご

云ふご、何もしないで遊んでばかり居る中で、お何嬢は阿

母のお手助け、……實に感心じやありませんか。……鼻緒

を縫へば、なぜ悪う御座いますか。親のお金をたゞ費して

居る私共こそ實に〜恥かしい譯です。

斯くて、なほうつぶぎ居る少女を顧み。

貴嬢、何も恥かしい事はありはしません。……お立派な事

です。……子エ、貴嬢、……サア、入らつしやい。ちつご庭へ

出て見ませう、

道理にせめられて、始め、この少女をいぢめたる三人は左も

極り悪さうに立ち兼ねるを。

貴嬢がたも、悪かつたご思召したら、其れで宜う御座いま

すから、もう以來、あんな事を御爲仰いますなよ、

大人びて、莊重なる詞の節の優しきにも似ず思はるく、生徒

少女が家庭に於ける行爲



達は顔を眞赤にして。

御免遊ばせ。……つひあんな事を申しまして、少女も機嫌を直して。

ア、其れならば宜う御座いますハ。……貴嬢皆様も御心易だての笑談ですから氣におかけなさらないで子、あはれなる少女は、しみく、此情あるしむけを嬉しくも忝も感じぬ。

イ、エ私は何とも思つては居りませぬ。

こ云ひけるが是れより後は、一層主人方の少女を姉の如く親しみ主の如く敬ひけるにぞ、少女もいご憫然と思ひて、母に請ひつゝ、陰に陽に助けければ、互ひに力になる事多くて、行末いご頼もしく見えけるごぞ。

又ある所に、中よき二人の少女ありけり。いつもの事にて、甲の少女、乙の少女が家に遊びに往きぬ。然るに、乙の少女が母は、心ざま正しき人なりけれども、疝癖強き人にて、少し氣に逆ふ事あれば、誰れの前にても、遠慮無く、大聲擧げて罵るを常とせり。この日しも、何か母は打ち腹立ちて、わが女にむかひ、さも荒々しく。

うるさい子エ。今日は忙がしいのにお友達なんか連れて来て、

こ云ひけり。少女は始めより母の許しを得て、今日此所に友は伴なひ來たりしなれども、今斯くの如く云はれて、殆ど當惑しつゝ。

でも、阿母宜いご御爲仰いましたから、

少女が家庭に於ける行爲



母はくわつと怒りて。

此兒がく、親にむかつて、口返答するか、  
少女は恐れて。

お免遊ばせ、

惚てく外の方に走り出でしが、友達の少女の其所に立たず  
み居たるを見て、左も氣の毒さうに、左も極り悪さうに。

アラ、貴嬢、此所に入らしつて、

エ、エ、……今まゐりましたの。……アノ子私宅へ歸りたく

なつて来てよ、

甲の少女は、アラ　ご云ひて、友の顔を見詰め居たりしが。  
貴嬢、……今の事お聞き成さつて、

乙　イ、エ、……何を、

甲　御存じ無いの、

甲も、けなげにも、母の疝癢を、友に知らせじごつとめるなり、

乙は、殊更に眞面目になりて。

私子。お復習する事、すっかり忘れツちまつて、……明日が  
苦しいから、今日は還して頂戴な。明日、還りに屹度、來ます

から、

甲　本當、……屹度

乙　屹度です、

乙は、鸚鵡がへしに答へて二人は立ち別れぬ。乙は我が家  
に還り入りて。

阿母、唯今、

乙云へば、母は不審さうに。

少女が家庭に於ける行爲



汝今日は夕方ゆふがたに還かへると云いつたつけが大層たいそう早はやかつた子。  
 少女せうじよは何なにも云いはずして、ハイと答こたへしがやくありて。  
 アノ明日あすのお復習さらいひをしてまゐりますよ、  
 母ははは口くちの中うちにて、ア、彼女あれは急きうにお復習さらいひの事ことを思おもひ出だし  
 て還かへつたのの見みえる遊あそびに實みが入いらずに、勉強べんきやうの事ことを思おもふ  
 のは感心かんしんだ、と悦よろこびけり。少女せうじよは、我わがが親友しんゆうの、あれ程ほど親おやの疝かん  
 癪せきを外聞そときき悪わるしと思おもひて、隠かくしたるなれば、我わがれも是これを聞きか  
 ざりしもののなして、何人なんびとにも云いはぬに、しかじこ心得こころ、遂つひに、  
 家いへに還かへりても、此事このことを語かたらざりきとぞ。親友しんゆうに對たいする行おこなひ、ま  
 ここに感かんずべき事ことなり。

三 少女が家庭に於ける任務

少女せうじよが父ふ母ははの膝下しつかにに在ある程ほどの任にん務むは、たゞ將來しやうらい世よに立たつべき準じゆん  
 備びを爲なすにごまるものなり。これを果實くわじつの木きに譬たとふれば、恰あたか  
 も、其二葉そのふたはなる時とき代だいとひこしく、そを培つちかふ者ものは、なるべく、美よき花はなを  
 着つけ、好よき果みを結むすばしめんと、希こひれがふが故ゆゑに、肥料こやしを選えらび、土壤つちを吟味ぎんみ  
 し、時ときも惜おしまず、勞らうも厭いとはずして、多おほくの金かねを費つひやしつゝ、只管ひたすら其成せい長ちやう  
 を待まちつにこそあれ。されば、非情ひじやうの植しょくぶつ物ぶつならば、斯かくまで園丁えんていの心こころ  
 を盡つくし、力ちからを入いれたるか、ひも無なく、花はな咲さき實みのらで、枯かるとここあ  
 りこもせんすべ無なしと云いひても、已やみなん。人ひとは、有情じやうじやうなり、殊ことに萬  
 物ものの靈長れいぢやうとして、いかでかは、育はぐみ養やしなはれたる父ふ母ははの恩おんに報むくゆる  
 こと無なく、これに、失望しつぼうと落膽らくたんとを與あたへて、善よからぬ人ひととなり、果はつ  
 べきかは、斯かかれれば、其幼そのおとき頃ころより、深ふかく心こころを用もちひて、先まづ家か庭ていに在あ  
 る程ほど、常つねに規き則そく立たちたる日課にっくわを正ただしく履ふみて、好よき習し慣くせに染そまん



ここを期すべし。

日課

少女家庭に於ける間、先づ日課を定めて、なるべく其範圍に於て、事に従ふやうにすべし。さて、其日々のつごめを爲すの規則も、其年齢によりて、多少の變交あるべければ、爰に先づ、幼稚園時代、尋常小學時代、高等小學時代、高等女學校時代、ご定めて、四つに分ち記すべし。

女兒三四歳に及べる頃より、満六歳に達するまで、即ち幼稚園時代の年齢なる程は、大率、其身體を健康にし、其精神を純正くするを旨とし、且つ、こは、未だ、各自、我が分別より爲すこと能はざる、幼稚の者なれば、そは、他よりして、左記の如き注意を與ふべし。

但し、幼少の兒なりとも、必ず、正しき規則に従ふの習慣はつけざるべからざるものご心得べし。

先づ、其幼稚園時代に於ける起臥の事より云ふべし。

一 起臥 この年齢なる小供の就寢時間は、九時間より少なかるべからず。なほ、勞れたる時なごには、十時間以上眠らして可なり。而して、宵にはなるべく早く、寢に就かしめ、朝は、早く床を離れしむべし。就寢の間は、出來得べきだけ安靜にすべし。

寢起の時は、父母其他の長者にむかひて、御早う、御休み、又は、御機嫌よう等の禮辭を教ふべし。

親切なる母は、幼き女兒にむかひて、斯く云へり。

花子や、もうお休みよ。いつもの就寢時が來たから、

女兒は、ハイ、ご直ほに返事して、立ち上りしが、再び小戻

少女が家庭に於ける任務



りして。

阿母、……夕飯食べてから、幾つ時計が打つと寝るの、  
母は更に。

二度打つと寝るんです、其れで、ちようご夕飯食べてから、  
三時間立つのです。

女兒は、復た問ひかへせり。

母、でも、阿爺や阿母は、なぜ、まだお休みなさらないの、

阿爺や阿母は、大人だから、長く起きてますの。小さい時ほ  
ご餘計寝ないご、大きくなれませぬ。……だから、汝は、阿母

よりも、二時間程餘計寝ます、  
女、夜遅くまで起きて、朝長く寝てるご、なぜいけないの、  
母、其れは、ごうも身體の爲に、いけませぬ。なるたけ、朝早く起



少女が家庭に於ける任務



きて夜は早く寝るが宜いのです。其れでも大人になると、いろ／＼の用が出来て左様出来なくなる事もあるんです。ア、宅の鶏の雛を御覧なさい。夕方になると母親の羽がひの下に首を突込んで寝せて頂戴々々ツて鳴いてませう。そして朝は汝よりも早く起きます。親に起されないでも起きます。……汝、雛鶏よりも早く起きた事がありますか、

女

イーエ、ありませぬ。私が朝お顔を洗ひに往く時、いつでも雛鶏はもう庭に出て、びよ／＼／＼と鳴いてます。……雀

母

も、私より早く起きて、窓で鳴いてます。子、御覧なさい。鳥でも朝早く起きて、銘々の業務にかかります。……で、汝も夜はゆつくり寝て、朝は早く起きて、幼稚

園にゆくのです。雛鶏も雀もむづかつたり何かしませぬ、私も朝早く起きて、幼稚園に行きます。

少女は、眼に近く見るものゝ、たごへに烈まされて、朝機嫌よく成れりござ。

尋常小學校時代も、なほ、九時間就寝せしめて可なり。高等小學校時代よりは、大抵八時間ばかりにて可なれども、其體格によりては、なるべく長く就寝せしむるを可とす。高等女學校時代にては、八時間度を、其れより短縮するは悪し。孰れもなるべく、宵は早く寝、朝は夙く起くるがよしと心得べし。

少女が年齢やう／＼長じて、父母の小間使も出来る程になりたらば、其己れが體育衛生の爲、學校通ひの都合により、父母に先立ちて、就寝るなれば、常に餘義無き故に、父母の寝を待たずして、寝



るなり云ふことを忘れず同じくは父母の床を延べ其就寝中に入用の物などは枕上に取揃へ置き、おさきへ御免を蒙るよしを申して就寝るやうにすべし。

寝る時は身體をのびやかにして安眠すべし。されど枕をはづし、衾をはねのけ手足あらはにそり返りて眠るは女のたしなみ悪き一つに數へらるくなれば年齢十二三歳に及ばず寝る時も恥かしからぬ顔つき身なりせん事を心がくべく又左様のふるまひあらば側よりも早く注意して好き習慣をつくべし。

齒ぎりも悪き癖なり。殊に女子はかゝる癖あらば早くより治すべし。素人にて治し難き程甚しくば能く醫師に相談して速かに治せしむべし。其他就寝中の悪しき癖は早く除き去るべし。

少女自身にて身邊の始末もなし得らるる程になりたらば身じ

まひより衣服の取扱一切も人手を借らず自らなすべし。先づ朝起きては口漱ぎ手水つかひ化粧し髪を繕ひ衣服皺めぬやうに衣紋正しく着用すべし。束髪はもとより日本風の結髪なりともなるべく自分に出來るやうになすこそよけれ朝の身じまひに暇ごるとやうにては終日用のはか取らぬものなり。手早くして清潔になさると習慣をつくべし。そは何事にも順序立てよくして、ぐつぐつせぬ癖つくるが肝要なり。

又我れと眼覺むること能はずして人より呼び起されたる時は、機嫌よく返事して其起されたる禮を云ふべし。決して不機嫌なる容子見すべからず。俗に朝機嫌悪しき人は一生不幸なりといふ諺まここに味ひある事なり。

二 食事 總じて飲食はなるべく一定の時間に於てすべく殊

少女が家庭に於ける任務



に、幼少の頃は、一層能く注意して、濫りにせしめざる習慣をつくべし。飲食に於ける、時、分量、種類、調理等も、出来得べきだけ、衛生の規則にかなひて、滋養品多く、消化し易く、分量適度にしてい、且つ其食事の時間正しきを守るべきは、男兒も、女兒も、大抵同じ心得なるべし。雖も、女子は成人になりても、男子の如く、軍役に服すること無く、又は、長き旅行を續くる等の場合も、少なきものなれば、不時の困難にも耐へ易き爲に、こて、殊更に悪食を試み、飢渴を忍ぶ等の試みをなすにも及ばざるべければ、なるべく、正しき規則に従ひて爲すの習慣をつくるこそよけれ。されど、女子なりとも、何時いかなる困難に遇ふことありとも計られねば、決して、美味美食に飽きて、驕に馴るゝが如き事は、固く自ら禁じて爲す可らず。食事は、必ず、一定の時に於てのみ爲すべし。決して

濫りに爲すべからず。假令ば、朝は、七時、晝は十二時、晩は六時、なごやうに定まりたる三度の外には、幼兒の幼稚園より還りたる後、少女の學校より還りたる時、即ち、三時より四時の間に於て、輕き間食、茶等を、少量用ふるは、可なり。其れも、用ひずして、濟まば、最もよし。此外には、すべて、食事の直後にのみ、菓子、果實は、食すべし。間食を濫りにする時は、三度の食味無く成りて、不愉快なるのみならず、大ひに胃を傷ふに至るべし。胃は、人々の食物を入るゝ毎に働きを、始め、大凡、三時間にして、胃中に、食物を消化するの職分を、務め、終れば、暫らくは、休まん事を、欲するは、恰ご生徒達が、學科中、一生懸命に勉強したる後には、少し休みたじと思ふこと同じ事なり。されば、胃を三時間働かしたらば、二時間は、十分に休ませねばならず。然るを、若し、胃が働きて、も、休むこと協はざ



れば、遂に不平を起して酸き水を吐きたり。胸を痛めたりする事  
こなる故間食は、厳く禁じて用ひぬがよきなり。

少女順子は、能く母の云ふ事を理解して、何事も直ほになす

故に、身體も甚だ健康なりけり。ある日、學校より還りて見れ

ば、母は用事ありて、親戚に行きたりこて、留主なりき。隣家の

主婦は、順子が好物なる菓子を持ち來たりて。

順嬢や、サアこれを上げます。……貴嬢の御好きな物を。……

阿母がお留主で嘸淋しいでせう子、

紙に包みたる菓子を與へければ、順子は、恭しく、諸手に受け

て、にこやかに笑みつく。

お叔母様有難う御座います、

隣家の主婦は、更に。

じやア、私は用があるから還りますよ。阿母に宜しく、……  
左様なら、

ご云ひ捨てて出で去りたる後に、順子は、左も嬉しげに、美し  
く、甘さうなる菓子を打ち見てありしが、忽ちに心づきたる  
やうに、祖母の居間へ走りゆき。

これ、お隣のお叔母様に戴きました。食べても宜う御座い  
ますか、

祖母は眼鏡起に打ち見やりて。

オヤ、其れは宜い事子エ。……ア、宜いごもお食り、

順子は、押戴きて、再び祖母にむかひ。

阿祖母様、これ上げませうか。孰れでも阿祖母様の御好きな  
のを、



家庭の心得

祖母は打ち笑

ひて。

有難うよ。

………

私はず。

洋のお菓子

は嫌ひだか

ら、もう澤山

汝お食り、

順子は一寸目

禮して、

其んなら私



が戴きます、

さて、一つ取りて食せんごせしが、また急に頭を上げて、次の

間なる柱時計を見て。

ア、もう、五時だハ。………今に晩のお食事だつけ。………不可

々々、オ、不可かつたつけ、

順子は菓子を取りやめて、紙にもこの如く包まんごするを

見て、祖母はふりかへり。

汝、一人で何を云つて、何をして居るの、

順阿祖母様、私はすつかり、阿母の御爲仰つた事忘れつちま

う所でしたけごも、やつご、今思ひ出しましたから、お菓子

を食べる事を止したんです、

祖へエ………左様………ごう云ふ事を、

少女が家庭に於ける任務



順阿母祖様此間阿母が私に咄して聞かして下下さいまし  
 たの食物は口の中では唾液胃の中では胃液が其食べた  
 物に混つて消化して、そして、まだいろんな所を通る時に  
 さまざまの液が出て来て、お手つだひをして、すつかり食  
 物を消化しちまつて、滋養になる物は、身體中へ送り入れ  
 て、不可い物丈は、身體の外へ出さちまうんだから、其れで、  
 斯うして、人間が生きて居られるんだ。……若しも、其れを、  
 私共が胃にお休みの時間を與へないで、日常働かして置  
 かうものなら、胃が不平を云つて、私達を病人にしちまう。  
 胃は三時間立つと、呑み込んだ食物を消化して、そして、二  
 時間は休みたいと云ふんだから、其れだけは休ませなけ  
 ればいけないと、御爲仰つたんです。……其れですから、も

う、一時間は何にも食べてはいけませぬ。今にお食事が済  
 むと、其後で食べませう。

祖母は、これをつくづく聞き居たりしが。

汝は能く阿母の教へて下下さつた事を忘れないで居ま  
 した子。そして、能く養生の事がわかります子。阿祖母様も、  
 つひ忘れて、汝がお菓子を食べても、宜いかと聞いた時、宜  
 いと云ひました。つけ、其れは、今汝が云ふ通りです。善い兒  
 だ、

と褒めければ、順子は悦びて、其菓子は、晩食の後に食しけり。  
 又食物は、食べたしと思ふ時にても、濫りに貪り食ふこと無かる  
 べきは、勿論にて、其食べたく無しと思ふ物、即ち餘り好物ならぬ  
 菜なごにても、勉めて、いつもの分量だけは食すべし。最も、病氣に

少女が家庭に於ける任務



て食のすまぬ時、少し食し過ぎて常よりも空腹にならぬ時  
 なごには強ひて食すべからず。雖も我儘の爲に、菜の氣に入  
 らずして、食を少なくする等の事あれば、次の食時間までには、ひ  
 もじくなりて、つひく間食をも用ふる事となり、果ては胃を損  
 ひて、困難するやうに成りぬべきなれば、能く自ら制して、氣儘の  
 故、食の分量を減ずるなごの事無きやうにすべし。  
 又、食事は奇麗にすべし。彼れ是れを突き散し、物を打ちこぼしな  
 ご、亂暴なる悪習慣をつくべからず。  
 やうく、妙齡にもなりたらば、食禮をも習ひて、見苦しからぬや  
 うに食事することを感じゆべし。

ある家に、四五人の少女打ち寄りて遊びけるが、其中の一人、  
 年齢十五六歳ばかりの少女は、殊に一際目に立ちて、行儀よ

く、心ざまも、いかにも正しき人に見えけり。いろくの遊嬉  
 は、てく後、主婦の梨子、柿なご、盆にうづ高く盛りて出だしけ  
 れば、みな手にく小刀を持ちて、皮を剥きつと食しぬ。然る  
 に、此梨子のぱりくご、噛む音甚だ高らかに聞えける程、例  
 の少女は、一片食したる後は、食せず、他の人の笑ひ興じつと  
 ある間に、剥き残したるは、そつご紙に包みて、袖の中に入れ  
 けり。主婦は、心ある人なりければ、宜き折を見計らひ、そご次  
 の間へ呼び出で、竊に。

貴嬢は、梨子はお嫌ひですか。お菓子でも上げませうか、  
 ご問ふに、少女は顔打ち赧めて。

イ、エ、好で御座います。……澤山戴きました、  
 婦でも、貴嬢ちつとも食りませぬではありませぬか、



少女はいよく、極り悪げにもぢく、したりしを、主婦にし  
ばく問はれて。

ア、母に度々戒められました。喉なり餅の事を思ひ出し  
まして、急に恥かしくなりましたもんですから、

主婦は、ハ、ア、ご此語を解して。

ア、左様ですか。感心なおたしなみです。……他人の出し  
た物は、澤山食べるが宜いには違ひありませんが、年若の  
御嬢様達にあんな馬の秣を喰ふやうな音のする、固い梨  
子を出した者も出した者、遠慮なく食べる人も食べる人  
で、……かやうな事に注意する人も少なくなつたれば、情  
無い事です。昔は、女の用意、ごいふ事は大切にされたの  
です。今、洋でいふ、品位格式、も同じ事です。……貴嬢

は實に感心で、また阿母のおしつけにも恐れ入ります。

さて、只管感服したりきごぞ。

三 温習 少女が家庭に於て、温習を要するは、無論、小學に入り  
たる後なり。而して尋常小學、第一年は、別に温習ごいふ事を爲す  
にも及ばず。第二年級以上より、第四年級迄の間は、其學級の進む  
につれて、次第々々に、温習の時間も長くすべきなれども、大抵、三  
十分以上一時間以下にごごめて、其れより多くは、決して爲すべ  
からず。原來、尋常小學の間は、學校に於て、其教場に在る程、先生の  
申さるゝことを、能く、謹聽して、深く心にさへ留め置く時は、  
別に家に還りて、復習を多く爲すにも及ばざるなり。然れども、病  
氣其他、餘義無き事にて、休學ありなごすれば、從ひて、其補ひもせ  
ねばならず。されど、また、習ひたる所を、読みかへし、又は、先生の教



へ給はりし事を心の中に繰り返し思ひ出で、其善き導きに従はん。考ふる等多少は温習時間を要すべし。然しながらこの時代は、先づ第一に、身體を健康にし、次に精神を強固にする。即ち其將來に識なる花をつけ、智なる實を結ぶべき臺木を十分に培植置かざるべからず。よりて記憶もよく工夫も深くなるには是非とも、身體の大丈夫になりて、常に心の正しきに居るが肝要なれば、是れらの點に注意して、さて學問は爲すべきなり。温習の時間はなるべく短き間に氣を引きしめて、確乎と善く出來るやうにすべし。浮々として、外に心を散らしなごしつと、長き時間を費すべからず。斯くして爲したる復習は何の役にも立たぬものなり。すべて時の使用法は、幼きより能く心して、冗費せぬやうに、物事を順序立てて爲す事をならすべし。一日に十分間儉

約すれば、六日間には一時間の利益を得る事となるなり。是れを一年に積り、一生につぐむれば、頼しき利を得るに至るを悟るべし。西洋の語に、時は金である。こは、まことに、文明社會に行くと所の適切なる金言にこそあれ。時の利用を思はざるは、みな、未開國民が通弊なりかし。さて高等小學に至りては、温習は、一時間以上、二時間以下にこごめ、高等女學校程度に進みても、毎日平均三時間より以上に亘るべからず。前にも云へるが如くなるべく短き時間に於て、十分なる勉學の出來るやうに、時を巧みに使ふ方法を工夫すべし。總じて家庭に於ける勉學の方法は、先づ第一に、先生より教へられたる事を忘れぬやうにすること。第二に、其覺えたる事を、應用して、活かしむること。第三に、教科書の外、各自の力に應ずべ



き雑誌其他有益なる書物を適度に読み味ひ又は諸物體に就きて己れが智識の試験を自ら爲すこと(但し教科書以外の書物には往々若き女子の心を汚れに導き悪きに誘ふ等の事あるものなれば此選定は我が見識の定まらぬ間は家庭監督の任に當る人に依頼するを安全なりとす)第四に時の使用法を巧みにして且つ僅かに五分七分といふ短き時間に於ても亦は物騒がしき中に在りても能く爲さるゝやうの習慣をつくること第五に温習する各學科の順序だてよくして此次にはこれ先づ始めに豫め定め置くこと以上の如き條目法に従ひて勉むべし。又要用なる温習の時間内に於ても父母又は長者の餘義無き用事を命じ給ふ事あらば決して不機嫌なる顔つきをなし或ひは其命を拒み學校の事が忙がしいからなごゝ我儘を云ふべか

らず其れも臨時に課せられたる等の事ありて爲さざれば翌日先生に對して申譯無しと云ふが如き場合ならば能く其由を長者に申し其許しを得て勉強すべし大抵の事は兼ねて幾日の何時は何ぞ學科はわかり居るものなればなるべく一日二日前より準備をなし置き前日に至りて惚てぬやうに心し置くべし。すべて學校にて習ひたる事の復習を爲すはよし下讀は能く心して爲さざれば不可なり勿論學業進みて何書も大方は自ら調べて後教師に質問を試むる程になりたる以上は是非とも下讀を要すべきなれども小學時代などには下讀は却つて不利益になる事多し何となれば教師の教場に於て素讀を口誦し又は講義を授けらるゝ事を生徒先づ家庭に於て習ひて後更に學校にて教授を受くれば其事の重複になるが故に自づから教師の



詞の心に染まぬ等の事無きにしもあらず。されば、幼少の生徒には、なるべく下讀をせしめずして、復習を勉めしめ、其習ひたる所を應用して、一人未習の所も理解するやうの方法にしむくべし。小き女兒は、窓のほごりに、小學讀本の復習を卒りて、針仕事に餘念無き母親にむかひ。

阿母々々、私はもうお復習が濟んだの、  
母は打ちほく笑みて。

左様かい。其れは、早かつた子、  
女 けれごも子。阿母、雛雀は、まだお復習が濟まないんで  
すよ、

母 左様、……なぜ、汝は其れがわかるの、  
女 でも、阿母御覽なさい。彼の廣芝ン所に、母雀が一羽、雛雀

母 が三羽と居ませう、

女 ア、左様々々居る、

女 彼れ、アノ雛雀は、羽を動かしながら、同じ事を云つて、先刻

ツから、鳴いてます。ちゆひくくッて、……けごも、雀の

母は、まだ、もう宜いッて云はないんですよ。屹度、……だから

ら、雛雀は、ア、して、同じ事をお復習してます。……私より、

餘程記憶が悪いんです子エ、

母 左様だとも、人間は、ごんな動物より、一番賢いんだから子。

……だから、立派にならなければなりません。……汝は、此

頃大層、お復習が早くなつて、而して、宜く出来るやうにな

りました。何でも、物に取りかゝつたら、一生懸命に、側目も

ふらずに、さつさこしてしまつて、後でゆつくり休んで、そ

少女が家庭に於ける任務



して安心して遊ぶやうにしなければ不可せん。他の動物は人間のやうに、時の使用法が上手で無いから、何時までもく、同じ事をして居ます。たゞ食物を求めるところ、巢を作るのことに一生かたり切つてます。其れで遊ぶ事云つたら、飛ぶか鳴くかより知りませぬ。……子人間は大層違ふでせう、

少女はなる程と思へるさまにて。

左様です子エ。いつぞや阿母が御爲仰つたやうに雀は、いつでも同じ着物を着て、同じやうな事ばかりして居て、そして雨に濡れてます。惘然です子エ、  
母 左様さ。其れだから人間は人間らしい務めをしなければ成りませぬ、

この少女は、温習の方法をよくして、母にも、他人にも褒められけり。

ある廣き庭の廣芝に、姉と妹と二人して、學問の應用を、實地に試み居れり。姉は、先づ口を開きて。

ア、此間の押葉は、本當にまづく出来たハ。……今度は能く作らなくツちやア、

妹は、垣根ごしなる畑を指さして。

姉様、彼所に生えてる青いのは、彼れは大根ですか、蕪ですか、

姉は妹に問はれて。

彼れは大根です、  
妹 ござうして其れがわかりますか、

少女が家庭に於ける任務



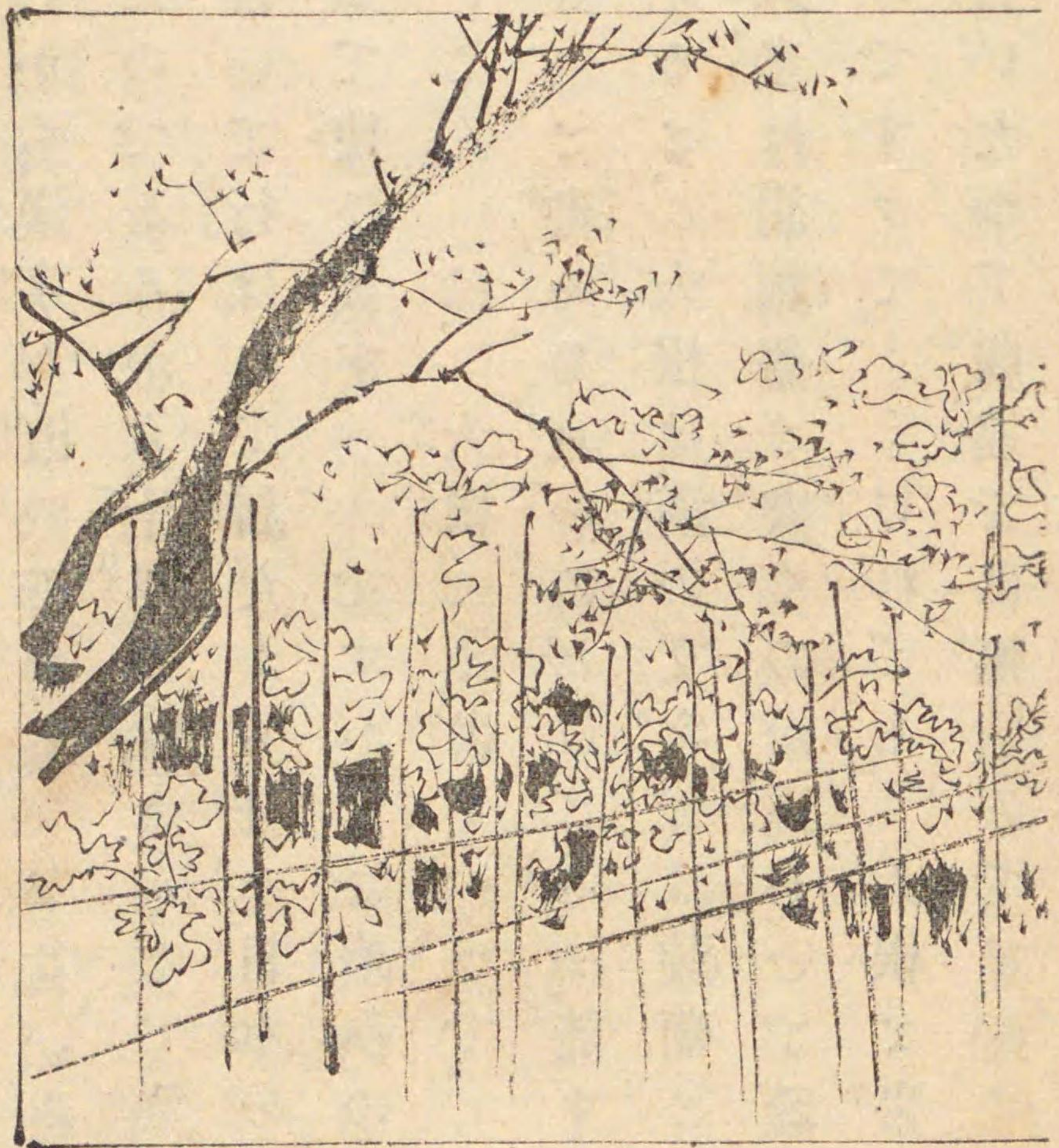
家庭の心得

姉 大根の葉はぎざぎざが深くて、そして莖も長いんです。葉の尖が大根より丸くて、ぎざぎざが浅くて、莖は短いんです。

妹 根の長いのが大根で、短いのが蕪です。か、マア其れが多いけれど、大根にも丸



ツこい形ちのがあり、蕪にも長いのがありますから、左様ばかりも云へないの。……今に爺ヤが引いてつて洗ふから、見せて、そして咄して上げませう、有難う、……姉様、其れからなぜ大根と云ふのを、蘿蔔と書いたり、人参といふのを、胡蘿蔔と書いたりするの、



少女が家庭に於ける任務



姉 其れは子。日本ではむかし、漢土の文字が渡らない間は、符牒のやうなものばかりで、本當の文字といふものゝ、通用が無かつた。其れから漢字が渡つてから、かなといふものゝ發明が出來たのであるから、千年の餘も、かなと漢字とが交ぜゝに書いて行はれて居たから、往々、日本の詞に、漢字を當て箝めて使ひます。……ですから、お讀みの通りに書けば、だいこんは、大根と書くべきで、にんじんは、人參と書いて宜いだけども、子能く、字を穿鑿して見ると、大根は、漢の文字では、蘿蔔と書くのが正しい、人參は、胡蘿蔔と書くのが正しいと云ふ事に成りましたのです。……けれども、大根と書いたつて、人參と書いたつて、間違では無いのです。

少女は此説明をつくく、聞き居たりしが、左も不思議さうな顔つきにて。

へエ、……左様、……じゃア、姉様、餘り學問何で開けるご、容易かつた事まで難くなるのです。子エ、

年長なる姉は、目を丸くして、妹を見つめ居たりしが、いつぞや、父が。

兎角、此頃の學問は、末に走る困つたものだ。やともすれば、繁文褥禮に亘る事が多い、

ご申されたる事がありしが、其時は、我れさへ能く其意味のわからざりしに、年若の妹却りて、斯くの如き意味を云ふこそ不思議なれ、深く心に感じたりしかば、姉は父のもごへ行きて。



阿爺、大人が、いつか御爲仰つたやうな事を、小さき妹が申  
 しました。實に妹は、私よりも賢う御座います、  
 さて、ありし事ごもを父に談れば、父は打ち笑ひて。  
 なる程、これは中々眞理に協つてる。字義の穿索も、時ごし  
 てはせねばならぬけれども、兎角本末を取り違へる事が  
 あつて困るのじや。……然しノウ、汝の妹もなる程、中々賢  
 いには違ひないが。小供ご云ふものは、或點は、存外に智  
 慧の進んでるものだ。たゞ、大人のやうに、其歩調が揃つて  
 居ないばかりだ。……であるのに、愚かなる親なごは、往々  
 其れに心がつかないで、小供の一部分の智の發達を見て、  
 宅の子は、大層伶俐だご誇つて、そして、其子を驕らせて、む  
 ちやくちやにしてしまふ事があるから、餘程氣をつけね

ばならぬ。無我な小兒は、寧ろ眞理に近い事を云ふもので  
 あるから、……然し兎も角も、汝達が、左様して、學問を實地  
 に研究しやうとするのは、宜い事である。……何でも、わか  
 らぬ事は、聞くがよい、  
 姉女は、深く父が教へを悦び受けて、ますく、姉妹は、學問を

勵みけるごなり。  
 四 運動及び遊嬉 運動の體育に必要なる事は、今更言を待た

ず、殊に學校、幼稚園などに通ふ小供の、長き休業中、又は、日曜日な  
 ごに、偶ま家に在りて、少しも運動をなさざる時は、忽ちに、食事ま  
 づくなりて、遂に氣分も悪くなり行くものなり。されば、學校等に  
 て、十分運動の出來たる日は、格別、然らざる折には、家庭に於ても、  
 出來得べきだけ、身を動かして、全身の血液の循環よきやうにす



る事肝要なり。然れども、爰に一つ、女兒に就ては、最も能く心得置くべき事あり。少女妙齡に及べば、月に一回づつ、兩三日間は、安靜にして居るべき時期來たるものなれば、是等の事は、母又は其れに代るべき人の指揮を受けて、其間は、なるべく、身體を動かさぬやうになすべきものご知るべし。尙又心得べきは、原來、近頃は、女學校に於ても、體育といふ事に、深く注意するやうになり、運動會や、體操に、いろ／＼の趣味を加へ、勉めて、女生徒の、活潑に動くやうに、ごしむくるが故に、女兒も、やう／＼に、戸外の遊嬉を悦び、追々に身長も高くなり、骨も太くなり、肉も固くつき、て、丈夫になる傾きの著きは、實に悦ぶべき事なり。然れども、趣味ある運動は、なし易く、趣味無き運動は、なし難きが故に、家庭にては、猶遊嬉運動に意を用ひて、面白き事を、家の内にて、も催す等の事は、未だ一般

に行はるべきにあらねば、年少なる少女は、趣味少なき、家の内の運動は、好まずして、つひ／＼坐り込む時間の多くなる事あり。それは一方より云はぐ、また無理ならぬ事なれども、いかに小供なりとて、常に面白き事のみなすと、在り得べきものにあらねば、家庭に於ての運動の大概は、種々の用事を利用して、かたはら運動の助けとなすものご心得べし。即ち、父母及び他の長者の小間使、室内の拭き掃除器具の取片づけ等、なほ、夏の頃は、庭園の艸を抜き、植木の世話、水まき等も、運動の爲ご思ひて爲すこそよけれ。某の姫君は、毎朝、竹箒を取りて、庭を掃除し、給ひしを、ある人の見て、餘りに見苦しくこそ、こいひしを、姫君不審かりて、なごて、庭の塵掃くが悪きか。何故に、列女傳には、后妃の御記に、自ら箕箒をこるごは書かれにけんご宣ひける、まここに最良じき



事なり。萬づ昔の風をよしと思ひて、今の風を悪しと思へる老人達なり。其繩飛綱引走り競なごこそは、男らしご咎めもせめ。若し少女達が用事を利用して、運動の助けとなし、室内を清潔に掃除し、器具の取片づけをよくし、又は其れらの起居を助けて、まめしく立ち働くを見れば、いかでかは、悪しごて眉打ちひそむる事のあるべき。すべてつまらぬ事と思ひても、其れに關はる時は一種の趣味を感じるものなり。況て女子は、他日一家の主婦となりて、内政を主り、各般の家事の指揮をなすべきものなれば、年少の頃なるべく、さまざまの仕事を自らなし、試み置きて、人召使ふ折、其勞苦を思ひやるの參助となすべし。

ある家に、五人の同胞ありけり。父母は、この五人の子の爲に、廣き後園を五つに畫りて、分ち與へて、母の云へるやう。

サア、汝達の年相應の廣さに、お庭を借して上げるよ。もう霜も追々ふら無くなつて、段々暖かくなりませうから、雑艸の生えないやうにするんだよ。そして、一番奇麗にした人には、御褒美が出るかも知れませぬ、五人の小供は大ひに悦びしが、先づ姉なる少女は母に斯く問へり。

阿母、其拜借した所へは、何か植ゑても宜うござんすか、

母は打ちうなづきて。

ア、宜いごも、汚くさへしなれば宜しい、

又、次の男兒は。

花壇こしらへても宜いんですか、

ご問ひければ、母。

少女が家庭に於ける任務





アイよ、今姉様に云つた通り、如何しても宜いよ、五人は大悦びにて、早速母さくもに、其後園に至り、此所から此所は、誰、其所より、其所は誰さ、いよく、其領分も極りければ、小供達は、朝も起されぬ中に起き出で、一人が鎌を持ちて行けば、一人は鍬を持ちて行き、水を汲むもあれば、搬ぶもあり。小さき艸の生えかけたるを、片端より抜き去りて、花壇を作らんごし、又は、木を植ゑんごいふ、さまざまの望みを互ひに語り合ひつゝ、悦び居たりしが、いざ種を蒔かん、小木を植ゑんごするに當り、年長なる姉ご兄ごは、能く自ら爲す事を得れごも、一番年少の少女二人は、兎ても鍬を取りて、土を起す事の出来ざりければ、泣き顔になりて。

兄様、私、こんな、奇麗に艸を取つちまつたけごも、兄様や

少女が家庭に於ける任務



姉様のやうに、土を起す事が出来ませぬ、

姉ご兄ごは慰めて。

じやア、其れだけは、私達が手つだつて上げよう、

されども、妹達はこれに従はず。

折角ですけども、阿母が、自分銘々でしなければいけない。

人に手つだつて貰つてはいけな、御爲仰つたんです

から私一人でしたいは、

姉は大ひに困つて、暫らく考へて居たりしが、

ア、宜い事がある。……斯うしよう。これから、いけない艸

は、度々生えるから、始終さらなければいけない。其れに、

私ご兄様の所は、廣いから、中々艸取りに手が廻らぬに違

いない。……で、其時、汝達に手つだつて貰ふ事として、其代

りに土を起す事だけ、私ご兄様ごして、爲て上げませう。子、

子、左様すれば宜いでせう、

男の子も、なるほご、これに同意せり。妹達も、大いに悦びて。

ア、そんなら、左様して頂戴、……取り換へツこだから、同

じ事です。子エ。みんな自分がしたの、

姉 左様ですとも、

ご姉の答へたるに、安心して、妹達は、姉ご兄ごの助けを得、芽

ばえの木を植ゑつけ、花ものゝ種子を蒔きなごしつゝ、各々

丹精を懲らしたるかひありて、五人の小さき領分には、いろ

くの植物生長しけり。斯くて、草花の盛りになれば、小供等

は、自分々の培養せし花を折りて、父母にまゐらせけるに、

父母も深く悦びて。

少女が家庭に於ける任務



汝達の丹精で、いろく美しい花が咲きました子。斯うして精出して培養しなければ、決してひこりで、こんな好い花の咲く艸は生ひ立ちませぬ。……私共も、汝がたの作つた花を見る事を大層悦びます。……然し、汝達は、この美しい花を、今得たよりも、もつと餘計の利益を得たのですが、其れがわかりますか、

こ先づ末の妹に問ひければ、少女は小首を傾げて。

この花よりも、もつと宜いこと、……私にはわかりませぬ、母は段々に問ひて、第二番目の男の子の順に及びける時、男の子は斯く答へぬ。

私にはわかりました。毎日々々極つて能く運動しましたから、先よりもつと、身體が丈夫に成りました。……其事

ですか、

母はうなづけり。

其事々々、……まだ其外にも利益がありますか、

一番姉の女兒はこの母の問ひに答へぬ。

左様です。まだあります。……朝早く起きる事が出来るやうに成りました。

父も母も打ち笑ひて。

子、其通り、汝達の領分は、能く汝達の爲に、身體をよくしたり、規則をつけたり、其上に、美しい花物をくれました。……其れも、みんな汝達が、労働した報酬です、

父はまた母と相談して。

サア、約束の御褒美を上げませう、

少女が家庭に於ける任務



さて、有益なる書物や紙や筆を、五人の子に分ち與へければ、小供は悦び勇みて、來年は、今少し廣き外庭に開拓せんご、各々其相談をなして、父母の許しを請ひければ、父母も悦びて、小供の請求に應じけり。  
又、ある所の女生徒達春季休業の終りたる頃、打ち寄りて遊びけるに、一人の少女。

皆様、お休み中は、何をして被爲居つたの、……私は、本當に悔しくて、サ。此お休み中、雨ばかり降つてるんですもの、それで、外へは出られず、宅に引つ込んでたもので、すから、すつかり胃を悪くしつちまつたの、

今一人も、詞を繼ぎて。

私もよ。……學校で、毎日あんなに運動してたのに、ちつこ

もしなかつたものだから、頭痛ばかりしまして、子、残る女生徒達も代はるく。

本當に子エ。つまらないお休みでした事、

其中に一人のみは、この不平の仲間はずれして、黙つて居たれば、始めの少女は、彼の女にむかひて。

貴嬢、ごうして居らつしやつたの、

間はれたる少女は。

私も、大抵宅に居りました、

ご答へければ、最前の少女重ねて。

貴嬢、運動出來て、……お困りなさらなくて、

斯く云はれて更に。

ハイ、雨が降つていけませんでしたけごも、運動は随分出

少女が家庭に於ける任務



來ましたの、……何て事も無いんですが、  
 此咄しを次の間に聞き居たる老婦人は、襖障子を開けて。  
 汝達、お休み中は雨が降つて運動が出来なかつたから、病  
 氣になつたなんて、そんな事が云はれた義理か。……汝達  
 は知んなさらないか知らぬが子。このお女兒は、日常、能く  
 阿母のお手つだひを成さるの、そして、お休みの日なんか  
 は、お洗濯をしたり、お掃除をしたり片づけ物をしたりし  
 てサ。……だから、汝宅にはかり居る時だつて、能く運動が  
 出来るの、其れは、偶のお休みの事だから、遊ぶは宜いサ。  
 ……けれど、運動は、面白くなくて、は出来ないと思つて  
 るのは、間違ひだよ。精神に楽しみを與へるのは、身體の爲  
 になるここには、違ひ無いけれど、今に、汝達、お嫁にでも往

つて御覽、外國では、ごうだか知らぬが、日本では、まだ、  
 お嫁様が、運動をしないご胃が悪くなるなんて、毎日々々、  
 テニスや、鞦韆や、何かして居られるものか子。けごも、能く  
 宅で、まめに働けば、運動にもなるんだ、……だから、少女の  
 内だつて、少しは、左様云ふ風にも、馴らさないご、お嫁に往  
 つた時、急に困つて、不愉快になつたり、病氣が出たりする  
 よ。子、其れだから、このお女兒は、家庭も、厳しくて、自分も、心  
 がけが、宜いから、お休み中、雨が降つても、運動も出来るし、  
 不平も無いし、そして、宅の人には、大層褒められて、悦ばれ  
 て、おいでだ。まことに、感心な事サ。

ご云はれて、多くの少女達は、極り、悪げに、顔赧め居たりごぞ。  
 遊嬉も、亦、其種類を選びてなせば、随分に、智徳體美の教育に裨益

少女が家庭に於ける任務



する事多きものなり。殊に少女の時代は、一年の中の春の如き時にて、何事も愉快に感ぜらるくなれば、此年齢には、なるべく、快潤こころよくかりとするにして、悦び樂しみつく、善き道に移るやうにしむるこそ肝要かんじょうなり。されば遊嬉は、極めて、年少の者には、大切なり。此方法は、尙委しく述べんとするれば、次項の戶外、室内の遊嬉の所に云ふべし。むかしある所に、何不足無く暮しける夫婦の者あり。世の人の多くは、まことに無智無學にして、愚かしき行ひのみあるを嘲り笑ひて、其妻に談らひけるは、

汝、何ご思ふ。ごうも世人は、子の育て方を知らぬ。まことに、昔の賢人が、養うて教へざるは、父の過ちなり。教へて厳しからざるは、師の怠りなり。ご云はれたが、さて、其師ご云ふ人に、碌な者が無い。……我れらに、若し小供が出来た

ら決して、この不完全な他人に交はらせないで、二人して、教育して、宅にばかり置かうじや無いか。汝も、女にしては、一通りの教育もある事だから、

妻は、夫の詞をげにもご思ひて、

其れは御最もです。私も左様思ひます、

ご答へけるが、幾程も無くして、一人の女兒を得てければ、夫婦は、これに、十分なる教育を施して、世の模範ごせんご思ひ、二人は、代はるく、小供の側に付き添ひ居て、敢て、他人を交へず、偶ま、外へ出づるにも、父か母かご一所にて、なるべく、人無き山邊なごのみに伴なひけり。斯くて、旦暮、學問、技藝の稽古を、父母かたみ代りにせめ立てければ、憐れなる少女は、恰かも、囚人の重き業務を、負はせらるゝが如く、夜も晝も、たぐ、



大人なる兩親の外には親しく詞をかはす者も無ければ、或時は一人椽側に立ちて雀の友呼び睦めて遊ぶさまを羨つ、又或時は池に住む魚の群が互ひに餌を争ひなごするさまを打ち眺めて、我れは何故に友も無く、又遊びごいふ事をも許されぬにや、何の罪によりて斯くひごつ家にのみ閉ぢ籠め置かるゝならんご、つくゞご思ひ詫びては、涙のほろほろごこぼるゝを拭ひもあへず、憂鬱に閉ざくれ果てし胸は、開くよしも無くて、遂に妙齡に及びては、一種の心經病者となり、肉落ち色青ざめて、見るもあはれなる容子となり、果ては、食事もすくまざるにければ、父母は、いたく案じ煩ひて、陰かに醫師を求めて、これに診せしめけるに、醫師は、先づ父母が女の育て方を聞きて、大ひに驚き。

これは、貴下方が、長き年月かゝつて、骨を折つてこしらへた病氣だから、中々治りませぬ。若し今少し打捨つて置いたなら、死さといふ旅に出立させるより、外に道は無いです。ご云はれ、猶さまゞに、其不可なるよしを説き聞かされたるにて、夫婦の者は、始めて夢の覺めたる思ひにて、いかにもしほくごして。

私共は、可愛い女の事ですもの、決して悪い心では無く、たゞく、外の人よりも立派にしようと思つたので、……本當にこれが角を治して牛を殺すごいふ諺ご同じ事でした。扱今からごうしたら、能くなるでせう、醫師は、しばく、打ちうなづきて、

其れは、御最もです、被爲仰る通り、貴所方は、決して、悪かれ



と思つて成さつた事では無いが、其方針の取り方が悪かつたので、散々の事になつてしまつたのです。……けれども、既往事はしかたがありませぬ。……將來の方法を間違ひ無いやうにしなければならぬで、……先づ、何は扱措き、息女のお友達をこしらへて、面白く、活潑に遊ばせるのです。其れから一ヶ月も立つたら、また私が来て見ませう、

さて、其日は醫師は還りぬ斯くて、一月餘り立つ程に、少女は、恰かも籠中の鳥の、廣き野山に放たれて、友を得たるが如く、やう／＼に憂鬱癖の薄らぎつゝ、半年ばかりの間に、全く健康の身體に復しぬとぞ。爰に於て、其父母も、小供には、有益なる遊嬉と友達との心要を感じにけり。

四 雑用 は、豫定の正課の外に出で來る種々雑多の用件なり。これは、社會の秩序、全く十分に立たざる國に於ては、一家の秩序も、亦從ひて不十分なるを免がれず。故に、自らも見えぬやうなる細かき用事の多き主婦と成りては、最も其然るを覺ゆるなりけり。されば、少女時代に在りても、年齢やう／＼長けてまづ、母の手助けをなし得るやうになれば、從ひて、此雑用の爲に正課を妨げらるゝ事無きにあらず。斯かれば、少女は、先づ、一日の正課は何時に是れ、何時間に斯う／＼と豫め定め置き、扱、雑用の爲にも、費やさねばならぬ時間をも、其中に算用し置くべし。爾する時は、決して急に惚て騒ぐやうの事無きものなり。

ある所に、一人の注意深き少女ありけり。其母も、亦賢き人にて、能く家庭の教育も行届きけり。この評判なりき。ある日、少



家庭の心得

女は母の傍らにいたりて。

阿母私のお友達に斯う云ふ方がありますが、那方が宜いでせう。……あの子一人の方は、大層學問が好きで、學校でも一番優等生なの……けごも子。お宅の方は、氣がきかなくて困るの、強情でいけないの、被爲仰るさうです。今一人の方は、餘り學校の事は能く出来ませぬ。……ですが、お宅では能く阿母のお手つだひを成さる。又御自分の事は、何でも一人で始末して、何から何まで能く行届く、氣がきく。……お云はれ成さるんです。……だけごも、先生は彼の兒は、ちつこも、お復習をしない。……見えて、何でも忘れつちまつて、しかたが無い。……被爲仰つて、被入つしやいましたの。阿母那方が宜いんですの。

母親はこの間に答へていへり。

其れは那方も、十分で無い。……其れは、いくら學校の事が宜く出来たツても、ちつこも、お宅の事をしないやうで、ハ、學文ご實地ごが放

少女が家庭に於ける任務





れツちまつて、將來主婦となつた時に、何の役にも立ちませぬ、

少女は、なほ重ねて。

母　じゃア、阿母ごうしたら宜いんですか、

其れは子。先づ第一、時間の使ひ方を上手にする事、第二にお復習をするにも、問題を考へるにも、何でも勉強にかゝつたら、熱心にする事を第一と心得て、そして其勉強のしかたを工夫して、冗せぬやうに、深く考へて、能く思想を練るなごいふ事をして、浮々ごしないやうにするのが肝要です。左様さへすれば、勉強がさつさはか取るから、其餘力で、雑用をするのはおろか、遊び事でも、何でもゆつくり出来るものです。其れを、時の使ひやうを下手にして、而

して置いて、忙がしい〜ツても駄目だ。其れは自分がわざと忙がしくするやうなものだ。殊に、何事によらず、物に取りかゝつてから、浮々ごして熱心で無い時には、いかなる容易い事だつて、決してはかざるもので無い。……子わかりましたか。すべて、學問でも何でも、時間の無い位な人が、却つて能く勉強する者で、物事が十分に足りて、時間も十分に暇な程ある人は、存外にするものでは無い。……其れだから、私は、那方も不可と云つたのさ、  
少女は、つくづく、ご聞きて、げにもご母の説に同意しけり。

臨時の事

日課、即ち日々の課業は、大抵幾日には、何時より何時までは、何幾

少女が家庭に於ける任務



日は何に何時と豫め定め置き、なるべく其豫定通りに爲すを可とするところは、既に前條に記しつ。然れども、個々の家には、また、大方臨時の事出で来るものなり。勿論少女時代は、主婦の時代よりも、臨時の出来事少なければ、例之ば、祝祭日に關すること、婚姻、出産、新宅、移轉、其他の祝ひに關する事、旅行、其他類似の事、これらは、先づ吉事に屬するものにて、疾病、死亡、各種の災害等は、みな凶事に屬するものなり。其場合に於ける心得、行爲等を少女が爲に一巨り云ふべし。

少女時代には、大抵の事は、臨時の出来事の爲になるべく、正課を妨げられぬやうにするがよし。雖も、已むを得ずして、正課を缺かねばならぬ事あらば、其事も兼てよりわかり居るならば、出来得べきだけ、正課を少しづつ、毎日々に繰り上げて、補ひ置く

べく、全く、其時に差しかくる迄、わからぬ事柄ならば、臨時の出来事終りたる後に於て、猶なるべくは、正課を補はん。勉むべし。すべての事は、一旦、其規律を崩す時は、やうく、不規律に流れて、遂に正しき道を履み行ふこと、難きに至る、情性を養はるゝ事無きにあらず、能く恐れ、慎むべし。

一 祝祭日、即ち、鎮守の神、及び祖先の祭りなどは、餘義無き事なれば、其當日位は、休學して、其事に關するも、可なり。其の前後も、無人等にて、無據時は、休學して、正課を廢すこともあるべし。雖も、大抵は、なるべく、正課を廢せざるをよしとす。こは、前以て、何月幾日、ごわかり居る事なれば、始めより、正課を缺かぬやう、補ひ置くべし。

二 一家に、婚姻、出産等のある時は、無人の宅なごにては、殊に其

少女が家庭に於ける任務



前後も混雑して、學問等は手につかぬものなり。また、やうく、手助けも出来る年齢となりては、無論其用事にも關はらねばならず。こは、將來、自らも亦下り立ちて、取り扱はねばならぬ事故隨分に出來得るだけ家の助けならんことを要すべし。但しこれも早くよりわかりたる事なれば、豫め正課の補缺に注意し置くべし。況て、幼少の頃は、何事か家に在る時は、何と無く心嬉しくなりて、走り騒ぎ、家人の邪魔なる等の事もありがちのものなり。左様の事無きやうに心をつくべし。

ある所に、まことに伶俐なる少女ありけり。此兒、八ツ九ツばかりの年、嫂初兒を生みて、家内取込み、事繁かりしに、この少女は能くこれを汲み分けて、我が衣服の着換へ、其他の事も大抵は、手一つになして、少しも召使の手を勞せず。ひこり仕

度をごとのへて、能く通學をも怠らざりけり。ある日、嫂の里方の人、初兒見まひかた、遠方より泊がけに來て、しかも同じやうなる年齢の少女を伴ひ來たりしに、此大人しき少女は、友を得て、嬉しと思ふ心の中にも、客の少女が、遠慮げも無く、高き聲を出だし、足音あらく走り歩きなごするを見ては、大いに心配しけるが、或時客の少女にむかひて、子貴嬢宅の中では、もう遊ばないで置きませうよ。アノ、築山の亭へ往つて遊ぶ事こしませう。これからは、少女は不思議さうに。

なぜ、お宅の中で遊ばないの、其れは子、嫂様がお産遊ばして、まだ寢て被爲入るから、……私の母様が左様被爲仰たの、嫂様がお床に被居入る

少女が家庭に於ける任務





間は静かにして居ない、血が上るツて、

客血が上るツて何、

私も知らないんですけごも、屹度御病氣が悪くお成りな

さる事だと思ひますの、

客の少女は。

左様、

と驚きたる顔つきにて。

じゃア往きませう、

と打ち連れ立ちて、庭の方へ走り出でけり。斯くて兩三日間、

右の母子が滞在中、少女は少しも油断せず、能く注意して、静

かに遊びぬ。客に來たる婦人は、深く此少女の行爲に感心し

て、自分の女にいひ聞かせけるやうは。

少女が家庭に於ける任務



汝マア能く、當家のお嬢様をお見習ひよ。實に、感心な  
 お兒だよ。ア、して、阿嫂がお産なさつたツて、宅の人が忙  
 がしいのを察して、なるたけ、人の手にかゝらぬやうに、何  
 かを、自分でおしだし、又、遊ぶにも、喧ましく無いやうに、ツ  
 て、始終氣を遣つてサ。……本當に、好いお手本だよ。ちツこ、  
 汝も氣をつけなくてはいけない、

兩三日の泊り客にさへ、かやうに思はるゝやうなる、この少  
 女が行ひは、まことに感すべき事なり。  
 殊に、この少女が善き行ひをなして、少しも、したり顔ならぬ  
 は、ます、感すべき事なり。

三 移轉、其他の忙がしき折には、やく己れが事だに爲し得る程  
 にも成りたらば、自分の手道具身のまはりの物等を、なるべく、人

手を借らず、能く始末して、取搬びに便利よきやうに爲し置くべ  
 し。何事に就けても、先づ幼少の頃は、他の邪魔にならず、迷惑にな  
 らぬやうにし、追々成長しては、又能く他の助けとなるやうにあ  
 るべきなり。是れも、亦前以てわかり居る場合多ければ、其心して、  
 正課の補ひをすべし。

四 旅行は、年少の女子に在りては、家族の引移り等にて、家人と  
 諸共に都より田舎へ移るか。田舎より都へ登るかの外は、先づ大  
 抵は、春夏秋冬、夏季の休業中に於て、保養又は修學の爲に爲す事多  
 るべし。かやうの折には、親戚や朋友とも相ひ伴ふ等の事あるも  
 のなり。而して、諺に、旅を一所にすれば、其人の心の裏のわかる  
 ものぞ。云ふ言を能く、心得べし。是れは、心に裏面あり。或  
 ひは、我儘なる人、吝嗇なる人なごは、まことに、恥かしき心の裏の



見ゆるものにて、淺間しけれご、これに反して心正しく、寡欲にして、我儘ならぬ人は、常よりも見勝りのするものぞかし。されば、旅する時の注意も、平素の心がけこそ、第一肝要なりけれ。學校休業中に別荘又は、ある山邊海濱等に移りて、身の保養を爲すは、まことに好き事なり。なるべく運動を勉めて、新鮮の空氣を呼吸すべし。但し、一つ所に一週間以上も落ち着きて居ることならば、就學中の少女は、朝涼の間、一時間か二時間は、必ず温習をなして、學問の心の離れぬやうに爲すぞよき。さりこて、身體の保養を旨とすべき時期に、餘りに過勞なるほどの勉強は、決してなす可らず。身體を強壯になすことを、唯一と勉めて、好き時節に於ての勉強に身の入るやうにご注意すべし。

ある伶俐き少女は、母に伴なはれて、兄弟と一所に、鎌倉の海

水浴に行きけり。先づ夏季休業中、其所に居らんこの計畫なりければ、ごある農家を借り受け、宅の下婢をも連れて、自炊して暮らしぬ。然るに此所より二三軒離れたる所に、兼ねて相ひ知る家族の人の、やはり、一つの家を借りて住まふがありき。さて、前の少女は、正しき家庭に慣れて、行義もよく、規律も嚴かに、朝は八時より十時までは、必ず南面の涼しき坐敷の窓のところに坐を占めて、温習をつこめぬ。斯くて、ある朝、二三軒さきに在りける少女、この家の少女とは、同じ程の年齢なるが、意勢よく走り來て、今しも復習に餘念無き少女のほごりに立ち寄り。

貴嬢、御勉強、

ご往きなり、聲をかけられ、少女は、ふご顔をあげて。

少女が家庭に於ける任務



家庭の心得

ハイ、……もう直ぐ済みます、

外なる少女は更に、

貴嬢はなぜ運動に入らつしやらないの、

内なる少女。

私今往きますの、

云ひながら、時計を見て。

モウ十五分立つと海へ往きますよ。……貴嬢も入らつし

いな、

外嫌……イ、エ子。私嫌じゃ無いけども、貴嬢嫌でせう私な

んか遊ぶ事は、

左も嘲るやうに云ひて、いやに笑ひぬ。内なる少女はまじめ

になりて。



少女が家庭に於ける任務



内 なぜ、貴嬢そんな事御爲仰るの、  
 外 だつて、貴嬢は、海水浴に來てゐても勉強ばかりして入ら  
 つしやるじやありませんか、私なんザア懶惰者ですから、  
 ごうせ、

内 何ですよ。そんな嫌みばかり、……私、学校の先生も左  
 様被爲仰つたし、宅の阿母も左様御爲仰たんです。……お  
 休みの中だつて、朝涼の中、二時間位は勉強して、そして、其  
 後は、ゆつくり體も休めたり。運動もしたりする方が却つ  
 て爲になるつて、私も左様思ひますハ、……遊ぶつたつて、  
 餘り遊んでばかり居れば、遊び草臥てしまふハ、……だか  
 ら少しづつ勉強して、そして、後で遊ぶご其方が餘程面白  
 いと思ひますの、……其れに、學校の始まつた時、餘り長く

お復習もしないで置いた時は、本當に苦しいやうに感じ  
 ますのよ。……貴嬢、左様お思ひなさらないで、  
 さすがの懶惰者も、これには少し閉口せり。何と答ふべき詞  
 も無ければ、たゞ無言にて、うつぶき居たり。勉強家の少女は、  
 此體を見て氣の毒に思ひ。

貴嬢、明朝から、八時に私所へ被爲入いませんか。左様する  
 ご御一所にお復習が出來て本當に宜いと思ひますの、……  
 ……アノ其れに子、宅の阿兄は、忘れた所や何か、能く教へ  
 て下ださるんですよ。……貴嬢、おかいさう子エ、阿兄が  
 被爲入らないから、……私、屹度、阿兄に頼んで、わからない  
 所や何か、貴嬢にも教へて上げて頂戴つて、願ひませう。左  
 様すれば、阿兄は悦んで教へます。屹度、子、子、宜ござ

少女が家庭に於ける任務



んせう、  
 少女は熱心に親切に説き勧めぬげに、人の眞實ほご感動を  
 與ふるものは無し。始めは寧ろ、他の勉強を見て、嘲り笑ひ、我  
 が懶惰者の味方に引き入れんごせし少女も、少し恥かしき  
 心つきては、最初の意氣込に似もやらず、深き溜息をつきて、  
 いご沈みたる調子にて。

有難うよ。……私、本當にちつごも勉強しなかつたの、……  
 じやア、明朝ツから、貴嬢ン所へ來ますから、一所にお復習  
 して頂戴よ。そして阿兄にも頼んで下さいませよ、  
 内エ、エ、頼んで上げますごも、屹度被爲入ツしやいよ、  
 斯くて、其日は立ち別れしが、この親切なる勉強家の少女は、  
 昨日契り置きつれごも、さても猶、懶惰者の少女が來たらぬ

事もやご案じて、翌朝は、七時半に、朝飯を終るごやがて、急ぎ、  
 彼の少女の宿を訪づれ。

サア、被爲入ツしやいな。……私、誘ひに來ましたの、……是  
 れから、一所に往つて勉強しませう、  
 この宿に在りける少女の母も悦びて、  
 誠に御親切に有難う、ごうぞ願ひます。  
 二人の少女は打ち連れて、勉強に取りかゝりぬ。さて後は、懶  
 惰者も、勉強家に化せられて、一日も怠り無く、復習をこもに  
 する程に、段々面白みもつきて、遂に、二人ともに、負けず劣ら  
 ぬ勉強家となり、又、身體も至極壯健になりて、學校にても褒  
 め者の中に數へらるゝに至れりごぞ。

物見遊山も、其場所ご事柄ごの善良なるものを選べば、則ち可な



り。「少年は娛樂時代なり」ご萬づの物皆面白しご覺ゆる、年少女子は、花紅葉のもごに遊び、動植物園、博物館、繪畫、美術の諸品を展覽せしむる所、高尚なる音樂會等は、其正課の暇毎には、父母のゆるしを受けて往きて見る、甚だよし。こは、其精神を樂ましめ、身體の運動を助くる間に於て、あるひは、智徳の補益を爲すこと、少ならず。されど、其れも、正課の妨げとなり、又は、衣裝の競争場となるが如きは、斷じて爲す可らず。況て、徳育、體育に害となるべき、寄席等には、決して行かざるをよしとす。劇場も、幼少の女兒、妙齡の女子は、假令、其戲題の見て以て、差し支へ無きものなりとも、往かざるにしかず。況んや、其事柄の卑しく、淫りなるが如き、嫌ひのいさゝかにてもあらんは、云ふも更なる事なり。すべて、年少の者は、見る物、聞く物に心の移ろひ易きが常なれば、能くく、萬事に

注意して、清からぬ所、正しからぬ物には、近づく可らず。

年の頃、三十四五歳ばかりご見ゆる婦人、九ツか十程の少女が、手を引きて、淺草の奥山を逍遙せり。其時、少女は、

阿母、猿は、上手に果物を食べます子エ、

母なる婦人は、笑ひながら、

ア、汝より餘程上手だよ。竹女に剥いごくれなんて云はないで、ひごりで、能く皮を剥きます。

女阿母、まだ見る物あるの。

母、もう珍らしい動物は、マア、こんな物だらう子。

其時、少女は、少し隔たりたる所の、見世物小屋を指ざして、

彼れ、何、

母、彼れ、か、イ、

少女が家庭に於ける任務



家庭の心得

ご母は向うを望み見て、

彼れは見世物……何だらう子……ア、彼れは手の無い

兒が足でいろんな藝をするんだツサ。

少女は眉を皺めて、

つくづく、ご其看板

を見上げ居たりし

が、

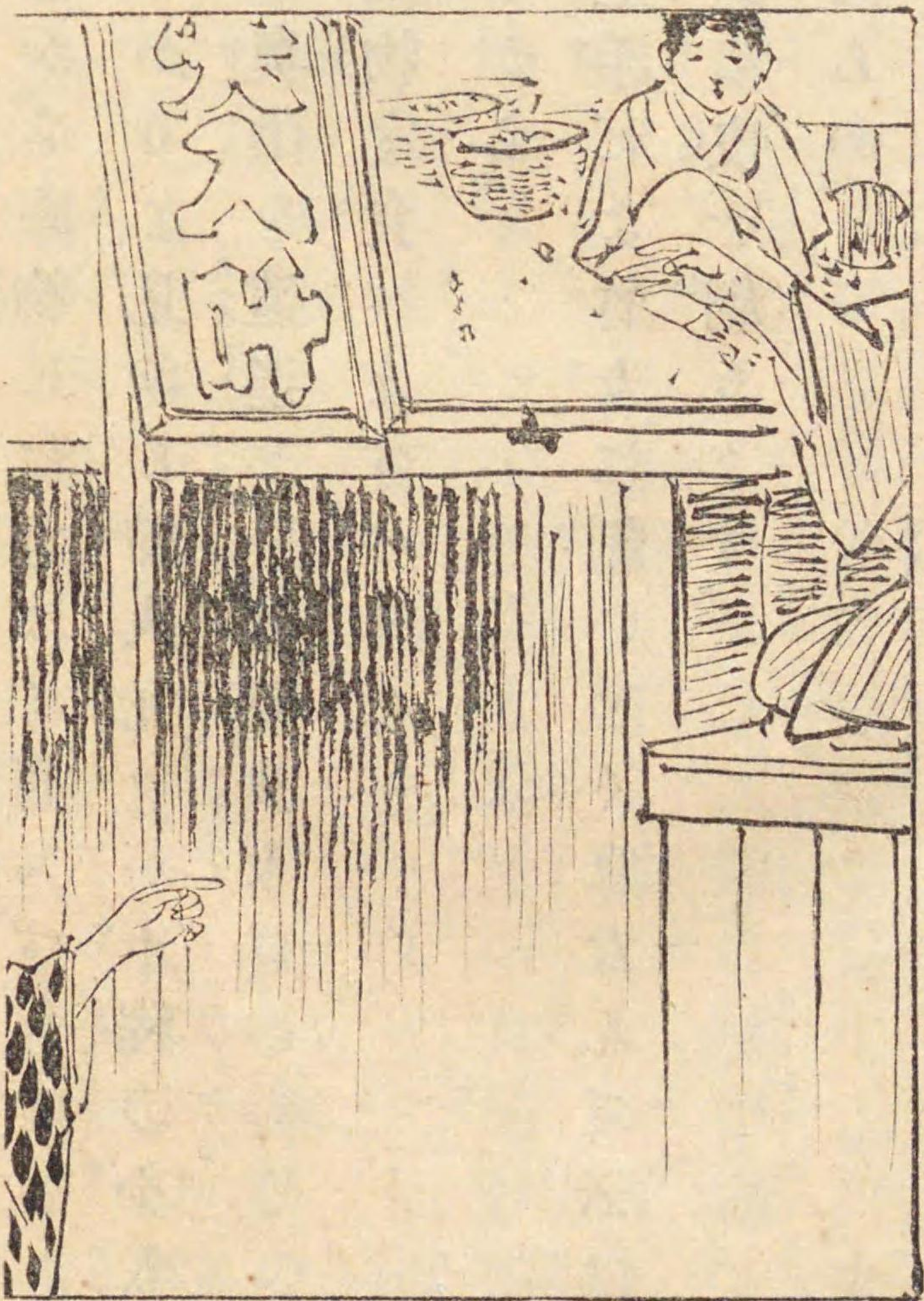
なぜ片輪の人間

何か見世物にす

るの。

母 其れは、手が無い

のに、足で藝を能



くするのが珍らしいから、人に見せて、お金をもうけるの、

女 だつて、阿母先生

は、學校で、斯う被

爲仰い、ましたの、

……片輪の人何か、

決して見る者

では無い。若し途

中で遇つても、なるだけ、見ない風をして居るものだ。片輪

の人は、他に見られたり、何かすれば、如何に、恥かしいか、悲

少女が家庭に於ける任務





しいか知れやアしないッて。其れは、本當に左様だ。私も思ひますハ。……其れになぜ其れを人に見せる人があつて、又、なぜ其れを見る人があるの、……彼の手の無い人は、嘸、恥かしがつて、悲しがつて居るでせう子エ。

母は、我が兒の道理ある詞につくく、ご聞きほれて居たりしが、覺えずも、太き息をつき、

ア、本當に、學校は有難い。教育程、結構なものはない。これが教への無い子であつたものなら、阿母、面白そうだ。見せて頂戴。云ふに違ひ無い、

ご獨語して、更に少女にむかひ、  
本當に、汝の云ふ通りだよ。實に、先生の被爲仰つた事は、御最な有難い教へである。……げごも子。ア、して、可愛さう

に、貧乏人の片輪の子を買つて來て、藝をしこんで、お金もうけをする様な人も、まだ澤山あるし、其れを又、面白がつて、見に行くやうな心無しの人も、もつと澤山あるんだから、爲方が無い。……だから、早く教育が那邊々までも行亘つて、皆の人が道理を知るやうになるご、そんな事は無くなるのだ。

ご更に小聲にて  
其れよりも、もつと汚れた邪まな事が、澤山ある社會に、小供を眞道に清く育てるご云ふは、本當に骨だ。

ご打ちつぶやきて、足早に少女の手を引きて、此所を去りたる母も、女も、いづれ正しき家庭に住まへる人なるべしご、友の語りぬる、いと床しき事なりけり。

少女が家庭に於ける任務



四 家内に病人ある時は、女子は假令幼年の頃なりとも、深く其痛苦を思ひ遣り、其看病の手助けを欲すべし。其れさへに、猶爲し難き程の、幼少の身ならば、なるべく、騒がしからぬやうに、邪魔にならぬやうに、注意すべし。況て、女は妙齡に成つては、いか程尊貴御方にても、看護の任にあたるは、其本分なれば、これらの事をも、兼ねて心得置かんことを要す。アリス内親王が、皇女の御身を以て、能く父君の御病を看護たまひ、ナイチンゲール嬢が、幼少の時、既に、牧師が、犬の傷つけるをいたみて、能く之をいたはりたる等、みな以て、少女が、好き手本となすべし。

ある村に、二人の感心なる少女ありけり。母は、はやくより、腰ぬけに成りて、立つこと能はざる、片輪者となり果てたるに、父また重き病に煩らひて、家業に出づる事も、難くなり、にけ

れば、この年少の姉妹は、互ひに助けられ、て、父母の看病に、耕作のここに力を盡しぬ。もこより少女の小腕なれば、十分の事も出来ぬ。ごも、年に合はせて、存外に力も強くて、大人にも、餘り負けぬ程に、耕し耘りなごしけり。さてある時、姉は妹にむかひて云ひけるやうは、

アノ子、汝何ぞお思ひか知らんが、去年の冬から、阿爺の御病氣で、たぐさへ、阿母の不自由な體の所だから、折角、汝だけは、高等科を卒業するまで、學校へ上げて置きたいと思つたのに、遣る事も出来なくなッちまつたが、昔違つて、今ヂヤ、兎ても尋常科位で引いては、人並の交際も出来ヤア、しないから、ごうしても、汝を學校へ、もう少し上げて置かうと思ふの、だけごも、左様するご働けない御



兩親を宅に置いて私が田へ出る事が出来ないから私の考へるにはこの田畑の作は人に頼んでしまつて其代りに私は宅で御病人の傍で内職しようと思ふから汝も私の考へが宜いとお思ひなら夜だけ私の仕事を助けておくれ

親切なる姉の詞を妹はいかで嬉しと思はざるべきほろほろここぼると涙を袖に受けて

姉様がそんなに被爲仰つて下さいますのですもの私は自分の爲に學校へ往く事が出来るンなら夜は寝ないでもよう御座ンすから私に出来るだけの事はお手つだひ致します

と云ふに姉も云ひがひありと悦び先づ其事と決しぬさて

一旦下がりし學校へ更に入學を願ふことなれば姉はもこの受持教師の宅へ往きて斯うくの譯なれば何卒妹に再び入學さるくやうに取計らひ下だされたしと頼みければ教師も深く其志しに感じていかにもして舊の級に入れて遣りたしと思ひけれども何分にも半年餘の休學故とても左様の譯にゆかず遂に右の教師は餘りに氣の毒に思ひて毎夜自宅にて教へ小學校だけの學力はつけて遣るべしと云ひけり姉妹はこの情ある教師の詞を聞きて大ひに悦び若し然らんには田畑の作を人に頼むにも及ばず姉妹にて晝はかせぎつゝ夜は妹だけ勉學することの出来る譯なればこそ深く嬉しき勇みてこの教師の意に任せぬ斯くて後は兩人の少女いよゝますく父母の看護と家業を怠ら



ずして、飢えず寒えず、其日を送りけるとなり。まことに感ずべき姉妹にこそ。

これに反對にいさ善からぬ少女ありけり。其家なる祖母は年老いて、長き病の床に沈みければ、氣もぼけくしく成り、形ちも穢げに成り増りて、果ては便通さへわからぬやうになりたれども、猶孫かわゆしと思ふ心は、昔に替らず、孫女の顔を見れば、苦痛も忘れて、にこくこ打ち笑みつく悦びて、我が傍らに呼び近づけんこそすれど、この無情なる少女は、却りて、是れをうるさく思ひ、猶強ひて云へば、眉をひそめて、嫌だよ。お祖母様は穢ならしひハ子。そんな汚れた床の傍何か……私、其所へ往くことは嫌。

睨めつけて、走り去る孫女の後ろ姿を、この憐れなる老嫗は、

懐かしげに見送りて。

ア、彼の兒を呼んでおくれ……これ遣りたい。

枕がみなる菓子を取りて、床の中より這ひ出づるいぢらしさを、孫女は、猶眼にもごめず。

嫌てエば嫌だハ……食物何か猶穢ならしハ、

彼れは少しも祖母の側に寄りつかず、萬づ己がまくにふるまひけり。この少女が父は不在にて、母のみ諸共に住みけるが、母はまた、我が兒の愛に溺れて、少しも是れを誡むる事も無ければ、少女はますく、附け上りて、病める祖母の看護なごは片時もなしたる事無く、却りて、酷きしむけを爲しけるぞ、淺ましき斯かる家庭に育ちて、斯様の風に成りたる女の、いかでか嫁したる後も、舅姑を大切に取扱ふ事を爲すべき。



遂に不幸の境遇に身は沈みて侘しき世を送るに至れりぞぞ。

五 家族に凶事ありて即ち近親の死亡等家の内騒がしき時は物の心知らぬ幼き兒ごもは何事の悲しむべき筋のありぞこも知らで却りて多くの人の出で入りし賑やかなるを悦び戯れなごするものなり。そは其智慧の善悪を見わくるに難き程なれば、寧ろいごをしく憐れなる事に人も思ひぬべく又道の上よりするも咎むべき事ならねごもやうく、六ツ七ツが齡にも成りて、寒さ暑を知り東西を辨ふる程になりても猶其感すべき事にも感ぜざるは云ひがひ無き事なり前にも云へるが如く女子は殊更に感情強きものにて其感情の強きを善き方にむくれば即ち化し難き者をも化する女子が特殊の勢化ごも成りぬべきなれ

ば、ものを憐れご思ふ心は幼き程より養ひて家人の不幸なごに遇ひたらん折には其哀悼を思ひわくるやうにこそあらまほしけれ。

ある少女は、齡五歳といふ年に母を失ひけり。さて、それを棺にをさめて、葬送するまでは母の、たゞ永く眠り居たるごのみ思ひて、大人しくして居たりしが、彌棺舁き出ださんごする時、驚きて傍らなる人に問ひけるやうは、

なぜ阿母一人往くの、なぜ私を連れて往かないの。

涙に沈み居たる傍らの人々は、この頑世無き詞に、いごご慰めかねて、鼻打ちかみつゝ、

アノ子。阿母は、もうお歸り成さらないの。……汝の阿母は、死つたのだから子。……汝は、是れからは、猶大人しくせね